
ペルソナ3-Summer Wars-

栢木理雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペルソナ3 - Summer Wars -

【Nコード】

N4128N

【作者名】

栢木理雨

【あらすじ】

有里湊は、死の概念である”ニクス”から仲間と共に世界を守り、ソレを自らの命を以て封印した。そして、限界が訪れ永遠の眠りについた彼は、何故かマンションの一室で目を覚ましたのだった。そして、テーブルの上に置かれていたものは、転校の為の書類だった。その高校の名前は”久遠寺高等学校”

――誰も知らない夏が、今、始まる。

サマーウォーズとペルソナ3。当てはまらないような二つを無理矢理くっつけてみちゃいました。

夏健、健夏主義、そして主ゆか、主風の主義などの方には最初に謝ります。ごめんなさい！

また、この小説にはオリジナル要素や捏造部分が含まれます。そこ
のご理解をお願いします。

プロローグ（前書き）

ふとした妄想から始めてしまいました。

自己満どころかただニヤニヤしたいだけの作品です。

私も健夏主義者なんですけど、ペルソナ3もサマーウォーズと同じくらい大好きな作品なのであのキタローこと主人公クンにも救いとニヤニヤをあげたかつたんです！

もし興味の対象に入ったら、時間潰し程度でいいので読んであげてください。

では、よろしくお願いします。

プロローグ

「……………」

少年は、日光が照らし続ける中ただ自転車を漕いでいた。

額からは汗が滴るが、片方だけが長い前髪共々邪魔そうな様子を見せず、ただ自転車を漕いで行くのだ。端から見れば一心不乱に。しかし、その瞳は深い虚無に満ちていた。

「……………惰性、だね」

駐輪場に自転車を止め、カバンをカゴから拾えば、彼は校舎へと歩いて行く。

カバンの手に持つところの中に腕を通し、その腕をポケットに入れる。反対側の手ももちろんポケットの中へ。そしてその両耳にはやや音漏れする音楽を流すイヤホンが装着されている。彼の使うイヤホンは耳を全体的に覆う型のモノで、左右で長さが違うのだろう。左肩からうなじに回され、そのまま両耳にひっかかっている。そんなイヤホンの先には胸元にぶら下げた音楽プレイヤーが流れている曲名をディスプレイに映していた。

「……………」

音楽に乗るわけでもなく、やや猫背気味に校舎へと歩いて行く。彼

が向かうのは教室のある学舎ではなく、特別棟だった。

深い紺色の髪の毛は風に揺れ、その白い肌は日光に当てられて汗を反射させる。間違いなく美形に入るその容姿をまるで機械のように動かさない彼は、そのまま校舎の中へと入ったのだった。

—
—
—
—
—
—
—
—

「二人とも、早くからお疲れ様」

「お、湊先輩！　ちわっす」

「こんにちは、湊先輩」

物理部と書かれて扉を開き、湊と呼ばれた少年は口元を薄く笑みのカタチに変えて中にいた二人へと声をかけた。
すぐさま二人は身体ごと彼に向き直り、屈託のない笑みを迎える。

その反応に少しばかり目を細めると、彼は自分の定位置に座った。

「今日のお昼は冷やし中華だけど、二人は大丈夫？」

「はいっ！」

返答を受けて、湊はうん。と返す。時計の針を見ればお昼にはまだ早く、彼はそのまま目の前の二人の背中を眺めることにしたのだった。

「……はあ」

バイトに勤しむ二人を見て、彼はため息を吐いた。こうして音楽も聴かないで何も考えていないと、意識がある一点にしかいかなくなる。

何故なら、それは仕方ないだろう。なんせ彼は、本来、死んでいるはずなのだから——

——

「……なん、で……」

目を覚ました時に、少年一一有里湊は自分のいる場所に愕然とした。知らない部屋の知らない一室。そのソファに横たわっていたのだ。

「僕は、もう……」

目を瞑れば思い出せる。あの時の、一番最後の風景が。約束を果たして、眠るように最期の記憶が。

とても機械とは思えない暖かさのある膝を枕にして、屋上のドアが開く音と共に聞こえるたくさんの足音。そして、

「……ま、お疲れさん。……これに納得はいかねえけどよ」

幻聴かはわからないけど、聞こえた先輩の声。それを耳に、自分はその生を終えたはずだった。

「っ……」

飛び起きて部屋を見回せば、一人で暮らすには少し広すぎる部屋があった。理解のできないその部屋の広さに、少年は数回瞬きをする。そして、目の前のテーブルに置いてある”ソレ”に視線を移した。

「なっ……」

理解ができない。けど、そこには確かに自分が以前いた……仲間との壮絶な、けれど忘れることできない確かな日々を歩んだ学校の名前もあり、一身上の都合により転校することが書かれていた。

「どづいつ、こと？」

日付は四月一日。嘘をついていい日ではあるが、これが嘘なら誰か教えてくれ。と湊は内心で叫んだ。

「三年生……」

きっかり、自分はあるところからここに”転校”してきたらしい。なんだそれは。まさか、あの出来事が夢だったと言っのか？

「そんな、バカなっ！」

わかっている。そんなはずはない！
けれど証拠付けるモノもない。

落胆に肩を落とし俯く湊だが、足元に転がるモノを見て、彼の目は

見開かれた。

「召喚器……じゃあ、やっぱり」

銃のカタチをした、自分の写し身を喚ぶ為の器。彼はそれと武器、そして仲間を頼りにあの戦いを勝ち抜いたのだ。

「でも、ならどうして？」

間違いない。自分はニユクスを封じる為にその命を使った。友達を、仲間との絆を感じながら。仲間との約束は裏切ってしまったが、後悔も未練もない。悲観もしていない。なのに自分がこうして生きている。それはどうにも理解できなかった。

「……まさか、影時間が？」

一抹の不安が彼の脳裏に過る。ならば、待とう。自分達の戦った、あの時間を。

一一一一一一

「……なんで」

時刻は午前零時。一日の終わりに存在する時間などなく、ただ……
当たり前のように時計は日付を変更した。

影時間はやはりない。ならば、何故？ 混乱が彼の頭を支配する。
が、その時、

ぐるるるる

可愛らしい音が湊の腹から響く。あまりの出来事に、影時間まで何
もしなかった彼のお腹は素直に食料を求めていたのだ。その事に、
やっと湊の顔は綻んだ。

「……どうでも……よくないけど。今は食べよう」

いつもの口癖を言えるほど余裕は無いが、鳴られてから凄まじい空
腹に襲われた彼は仕方なく冷蔵庫へと向かったのだった。

もちろん、中身なんて入ってないのだから近くのコンビニへ行くこ
とになるのだが。

— — — — —

「そういやさ、後一步だったんだろ？ 数学オリンピック」

「……うん」

「……数学オリンピック？」

目の前から聞こえてきた会話に意識を戻された湊は、聞き慣れない単語に思わず口を挟んでいた。気がつけば、一時間は思考に没頭していたらしい。思わず苦笑する。

「はい。いや、こいつってば数学の計算とかがめちゃくちゃ速くて、それで数学オリンピックに挑戦したらしいんすよ」

「けど、最終選考で答えを打ち間違えちゃって……」

「それが無ければ一位で抜けたってのになあ。ま、健二らしいっちゃらしいけど」

「うー……」

「そうなんだ。頭良いんだね、小磯は」

「そんな、先輩みたいに全科目とかじゃないですよ！　僕は、数学だけが取り柄ですから」

「でも、取り柄があるからこうしてそれを活かすバイトができてるわけなんだし。そういうのは誇っていいと思うよ」

「先輩……はい。ありがとうございます」

「僕は何もしてないよ。と、そろそろお昼にする？」

「はいっ。くー、湊先輩のメシがバイトの癒しだぜ」

「あはは、先輩のご飯美味しいからね」

「褒めても何も出ないよ？」

情性な毎日だが、この二人といると気分が安らぐ。だからか、この二人にはずいぶんと境界が薄い。そう自覚しながらも、湊はまた微笑んで無理矢理備え付けた台所に立っていた。

— — — — —

「私立月光館学園から転校してきた有里湊くんか。最後の一年だが、仲良くしてあげてくれ」

「……よろしく」

結局、流されるままに転校を終えて湊は三年生として生活を再び始めていた。召喚器を常に持っている辺り、自分のあの頃への依存の高さに呆れるところだが、でも未だに現実を受け入れられない彼にとって、これはお守りでもあるのだった。

「……」

最初こそ質問攻めだ。よくわからないまま某フェロモンコーヒーなどを飲んでいたりした結果、魅力は非常に高く彼の雰囲気は人を惹き付けた。だが、基本的に内気な湊はあまり話さず、それに無愛想になってしまふ為はその質問も放課後になれば終わっていた。それ

「思えば、小磯や佐久間と知り合ってもう三ヶ月か」

「そうっすねー。まさか、こうしてメシ作ってもらうことになるとは思いませんでしたよ」

「僕もです。まさか、お隣さんだとは思いませんでした」

「それは僕もだよ。ホント、びっくりだ」

材料を丁寧に料理で切りつつ、彼は二人に背を向けたまま微笑んだ。今はもういない料理の上手な先輩から学んだ料理の技術はメキメキと上達し、仲間や先輩からも評判だった。その頃から、彼は人に料理を振る舞うことを趣味の一つにしていた。

「けど笑うよな。健二と先輩の知り合い方ってば、まるで昭和の少女漫画みたいなんだからさ」

「さ、佐久間……いや、だってあれは前が見えてなかったんだからしょうがないじゃないか」

「確かに。僕も、前とか見てなかったし」

トン、トンと音を響かせながら、湊は窓から外をチラリと見下ろした。

—
—
—
—
—
—
—
—

それは、湊が教室を出て階段を降り、玄関に差し掛かった時のことだ。

「わっ」と……」

イヤホンをしてなかったら、その声に、乱れる足音に気づいたかもしれない。しかし彼は、それを聞いていなかった。聞こえるはずがなかった。

「うわぁっ!」

「っ!？」

ドン。と衝撃が湊の胸元に起きて思わずたたらを踏む。慌てて視線

を正面に向ければヒラヒラと散る大量のプリントと、尻餅をつく男子生徒の姿。

「……ごめん、大丈夫？」

校章を見ると自分とは色が違った。確か……二年生かな？　なんて思考しつつ、湊はイヤホンを外して男子生徒に手を伸ばしていた。

「あ、ありがとうございます」

手を引いて立たせれば、申し訳なさそうにペコペコ謝るその生徒。それから、悲しそうに散ったプリントを眺めていた。

申し訳ないのはこっちだよ。なんて内心呟いて、彼は小さくため息を吐いた。さすがにこれを見て放置して帰るほど、湊は冷酷ではない。

「手伝うよ。場所、どこ？」

「え？　あ、えっと……」

「この量を一人で運んだら、またぶつかるかもしれない。それに、

階段に躓いたりでもしたら危ないよ」

「あ、うう………すみません、ありがとうございます」

「いえいえ」

おどおどする生徒に、湊は微笑んだ。あそこで目覚めてから、初めてのちゃんとした笑顔だった。

——
——
——
——
——
——

「じゃあ、今日からここに?」

「うん。おかげでまだ右も左もわからない状態」

半分に分ければプリントは普通に持てる程度で、二人は雑談をしながら目的地へと赴いていた。

「それは大変ですね………あ、ここです」

「物理部……?」

「名ばかりですけどね」

物理部と書かれてボードの下にはオタク部と書かれており、それを上から斜線で消してある。更にその下にはパソコン部なんて書いてあった。理解できない湊は？を浮かべたまま、中に入っていく。

「ふう、ありがとうございました」

「おかえり健二。って、あれ？ 誰？」

「えっと、有里先輩。プリント運ぶのを手伝ってもらったんだ」

「え？ うげ、そんな量があったのかよ。なら俺も行くべきだったなあ……ありがとうございます、先輩」

「いえいえ、気にしないで」

小磯健二は、やや内気で控え目な性格らしく少し自分に似てるかな。なんて思っていた。自分はいれほど感情も出さないが、とも。

「気にしますって。ちょっと待っていてください。健二も、今回は俺のオゴリな」

「え？ いや、悪いよ佐久間」

「僕も、別にいらないよ」

「そういうわけにはいきません！ だからちょっとくら待っていてくださいね」

そう言うなり、佐久間と呼ばれた眼鏡少年は凄まじい速さで物理部の部室から出て行ったのだった。

— — — — —

「へえ、じゃあ先輩は健二と同じマンションなんスね」

「みただね」

帰ってきた佐久間から渡された缶コーヒーを飲みながら、湊は二人と話をしていた。

ちなみに、湊と健二の家が隣同士と知るのは少し先の話だ。

健二は数学が得意で、佐久間はパソコンに強い。また、健二は湊と同じマンションに住んでるらしい情報を手に入れた。
一方湊も自分が前の学校では剣道部に所属していたことや趣味が料理であることなどを話していた。

「……ちなみにさ」

「はい？」

「さっきから二人が言ってるOZって、何かな」

それは、湊の知らない情報だった。以前の記憶にはOZなんて単語を聞いたことがなかった。

驚いた二人から説明を受けると、それは確かに知らないものだった。けれど、以前から普及していたものらしい。……まあ、前の僕は連絡以外に携帯を使わなかったからな……と、湊は内心苦笑した。

一一一一一一一一一一一一一一

「それで気がつけば、僕も物理部に入り浸ってるわけだ。夏休みに入っても、変わらずに。邪魔になってない？」

「まさか！　むしろ美味しいメシ食えて幸せっすよ！」

「はい！　湊先輩にはいつもお世話になってます」

「なら良かった」

正直、あの頃に比べれば今の自分の生活は惰性だ。目的もなく、ただ”生かされている”。しかし、この二人と会話してる時は湊も心から楽しめていた。同年代に友人と呼べる者はいないが、湊にとつてこの二人は確実に友人と呼べる者だった。

「はい、出来上がり」

「うっは、美味そっっ！」

「慌てない慌てない。ほら、一回手を洗って来て」

「はは、まるでお母さんみたいっスよ」

「佐久間、失礼だよ！」

「あはは、さ、手を洗ったら食べよう？」

返事を返す二人に笑って、湊は割り箸をそれぞれの皿においた。

「よし、それじゃあ」

「」「」「いただきます」「」

手を洗い終えた二人が席につき、佐久間の声に二人が合わせる。そうして割り箸を割った瞬間、物理部の扉が勢いよく開かれたのだ。

プロローグ（後書き）

とまあ、ホントに序の序。始まりの中の始まりです。

プロローグなんで回想多かったですね。ちょっと反省してます（汗けど実際湊クンからしたら多分小説以上に混乱しててもおかしくないです。や、うちの湊クンはゲームの主人公クンほど無敵キャラでもないからかもしれませんが。

死ぬ瞬間の某先輩のセリフは私の完全オリジナルです。ガキさん大好きなんです！

そんな感じのノリで始まっちゃいましたが生暖かい目で読んだり見守ったりしてくれると非常に嬉しいです。感想とかくれたら泣いて喜びます。

では、また次回で会いましょうっ！

主な相違点（前書き）

今さらですが、プロローグの四月一日もちゃんと意味あります。

だって、ねえ（何

主な相違点

えと、ペルソナ3 - Summer Wars -
ですが、結構な相違点があります。そりゃそうだよな。だってペルソナとサマーウォーズだもん！

まず、主人公ことキタローこと我らが有里湊くん。彼の設定からいきましよう。

有里湊

ペルソナ3及び本編主人公。一年前、影時間なる一日の狭間にある時間における一連の事件の当事者であり、死の概念”ニクス”を自らの命を以て封印した。その際、身体から魂が離れたわけなので死亡したはず……なのだが。

名前は漫画版の名前を使わせていただいております。

うちの湊くんは、ゲームほど冷静でもありません。そりゃ、他の人に比べれば冷静ですけど、比較的目に感情がよく現れます。潤んだりとか。

無口で無愛想なものも、本当は内気で人見知りする部分があるからで、実は学校生活をちゃんと楽しみたいとか思ってた。口癖の「……どうでもいい」も面倒だからじゃなくて、ヤケになった時とかに出てきたりします。なんて言うか、ちよつとヘタレですね。それと少し天然で、本編以上に素直です。

けど責任感は一倍感じるし、相変わらず多方面に器用です。

パラメータはオールMAXなんで、頭はもちろん良いし、魅力もばつちり。普段は微妙だけどここぞの勇氣は凄い！　って感じの無敵キャラってよりは主人公補正の効いたキャラですね。魅力もばつちりだけど性格がああだから友達増えなかったり。お住まいは健二くん宅のお隣。これ大事！
あと、召喚器があるってことは……

ちなみに、この湊くんはかなり荒垣先輩と親しくしていました。料理を教えてくれたのも荒垣先輩だったり、要するに私がガキさん大好きなだけなんですけど、この湊くんはあの人の影響をだいぶ受けます。

また、コミュですが基本全部MAXで、エリザベスもしっかり倒しています。

やれることやって満足したまま死んだらこんなことになったって設定なんで。

女性コミュに関しては内容そのままに、特別な関係になってない……つまり親友的な位置で止まっています。そうしないとこのお話が昼ドラチックになっちゃうので（汗

ちなみにお金は何故か一年前のお金がフルにあります。そりゃもうすっごい額で。

健二や佐久間もちょっとしたこと以外はほとんど変わらずです。では、改めて本編を楽しんでください。

！
と言うか、楽しんでもらえるよう頑張るのでよろしくお願いします！

第一話"アルバイト":(前書き)

この回から夏希先輩登場!

いやあ、可愛いですよねえ夏希先輩。そんな可愛い夏希先輩をちやんと書けるように頑張りますのでよろしくお願いします。

では、始まり始まり。

「バイトやらない!？」

さて、冷やし中華を食べようかと言つところで三人は固まった。視線は揃つて扉に立つ少女に向けられていた。

「……篠原、突然どうしたの？」

「え、いやだからバイトやらない？」

バイト？　なんて脳内で返答しながら冷やし中華を口に運ぶ。うん、及第点。なんて自己評価をして、湊は少女——篠原夏希へと顔を向けた。

「小磯も佐久間もアルバイトはもうやってるからキツいんじゃないかな」

そう、健二と佐久間の二人はOZのアルバイトをしているのだ。他のアルバイトと掛け持つ余裕などない。すると、夏希はにっこりと笑つて人差し指を立てて、

「うん。だから有里くん」

「ふうん……つて、僕？」

見れば、後輩二人も訳がわからないようでその視線を湊と夏希の顔を交互に行ったり来たりさせている。

「うん。暇、だよな？」

「……まあ、暇だけど」

「ならお願い！」

並みの男子生徒なら一発で陥落してしまいそうな上目遣いで手を合わせ、夏希はペコリと頭を下げた。
どうしたもんかな……なんて思いながら冷やし中華を食べる湊。

—
—
—
—
—
—
—
—

「あれ、有里くん？」

「え？」

初めて会ったのは、この物理部の部室。水道があるからとカセットコンロやその他の機材を物理部の経費で佐久間が勝手に持ち込み作り上げた台所で紅茶を淹れていた時である。声をした方を向けば、名前ばかりよく聞くクラスメイトが立っていた。

「えっと……篠原？」

「そう。覚えててくれたんだ！」

「まあ、ね」

あれだけ名前を聞かされれば嫌でも覚えるよ。と、湊は内心で苦笑した。

――篠原夏希。久遠寺高校の生徒会長にして一番の人気者。いわゆる学校のアイドルやらマドンナやら。男子に対してやや一線を引くが誰にも平等に接し、男女両方から人気がある。ちなみに、剣道部所属でなかなかの腕前だとか。

湊の知る生徒会長は多方面に渡って化物のような成績を誇るが、やや世間知らずなお嬢様だったのに対して、この生徒会長は誰でも話せる気軽さを持っていた。同じクラスだが、話す機会も話す気もなかったもので、こうしてほぼ初対面のような感じになってしまっている。

「えっと、どうしてここに？」

「成り行き、かな。小磯や佐久間にいろいろ教わったから」

〇Zのことや、学校のこと。あの時とは違う今を湊は二人から聞いてなんとか情報を揃えていた。料理を作るのは、その恩返しと言ってもいい。

「そうなんだ。ちょっとびっくり」

「僕も」

「え、なんで？」

「篠原がここに来るとは思わなかった」

物理部と篠原夏希に接点が見当たらない以上、湊の言葉は当たり前前に聞こえる。

が、夏希は笑顔でそれに答えた。

「二人とは一年前にパソコンのことで知り合ってたね。ちよくちよく相談したりしてるんだ。私、電子機器苦手だから」

「なるほど」

納得したのか、小さく頷くと湊は新しいコップに紅茶を注いでいく。それを夏希に差し出して、首を小さく横に傾けた。

「とりあえず、飲む？」

——
——
——
——
——
——

「とりあえず、飲む？」

本当に同じ年か怪しいような顔と仕草で紅茶を勧めてくる湊に、夏希はひとまず頷いた。内心、疑問でいっぱいだった。

「あ、美味しい。なんか普通とは違う感じがする」

「前にいたところに、こういうのに詳しい人がいたから」

言って、窓から茜色の空を見上げる湊。

「――また、あの目だ。」

夏希は、初めて湊を見た時からあの目が気になっていた。まるで、目の前を見ていないような……達観したような、全てを諦めたような目。けれど、その瞳は憂いに満ちている。今までそんな目をした人を見たことのない夏希としては、非常に気になるところである。

「そういえば、私立月光館の剣道部だったんだよね？ あっちつて地区にあの早瀬もいるんでしょ？」

「早瀬？ ああ、うん。いたよ」

夏希の口から出たのはあの超高校級の剣道少年の名だ。遠くはないが、地区が若干違うせいか大会こそ一緒ではないが、早瀬のいる高校とはよく練習試合をしている。湊なら知ってるかも、と口に出したら、案の定湊は頷いた。

「一勝三敗。結局、負け越したままだ」

「勝ったことあるの!？」

「一度だけ。それも公式戦じゃないけど」

それでも、あの早瀬に勝ったことあるのは凄い！ と夏希は湊に笑いかけた。湊は少し困った顔をして、紅茶を啜った。

「本当に凄いのは早瀬だよ。上手くいってるというけど」

「……？ 知り合いなの？」

「友達」

至ってわかりやすい言葉で、端的に自分と早瀬の関係を言う湊。しかし、その短い言葉には誇るような、そんな感情が入っていた。

「そっか。あ、もう行かないと！ それじゃあまた明日」

「うん。またね」

口元を笑みのカタチに変えるだけの、微笑みにすらならない笑顔。けれど、その声は冷たくなく、穏やかな口調だった。

「……変わった人」

無口で無愛想っぱいけど、そういつわけじゃない。もう少し、話してみようかな。なんて思いながら夏希は物理部を後にしたのだった。

—
—
—
—
—
—
—
—

「内容は？」

「えっとね、私のひいおばちゃんの誕生日が長野であるんだけど人手が足りてないからそのお手伝い。三泊四日だけどご飯つきで報酬もちゃんとお支払します。どうかかな？」

「ってことは、夏希先輩と旅行じゃないっすか！」

「佐久間、話を聞いてた？」

「別に、それだけなら受けてもいいけど。小磯、平気？」

「あ、はい。母さんも出張から帰って来ますし」

「そっか。なら」

「??? どういうこと?」

「えっと、健二と湊先輩の家って隣同士なんですよ。んで二人ともほぼ一人暮らしだからよく湊先輩の家に集まって夕飯食ってたりとかしてるんですよ。な、健二」

「うん」

料理が趣味の湊としてはそれで健二や佐久間が美味しいと言ってくれればいいし、手間だなんて思っていない。健二の家庭環境も、自分のそれに似てる場所があるからか必要以上に構ってしまっ。

「そういうわけで、僕なんかでいいなら受けるよ。篠原」

「ホント!? ありがとうっ!」

「気にしないで。それで、いつから？」

「えっと、明日」

「……あした？」

「先輩、さすがにそれは……」

「どんな無茶振りっスか……」

健二と佐久間が引きつった笑いを浮かべて夏希がえ？ と首を傾げるなか、ポカンと口を開いていた湊はこっそりため息を吐いて、

「……どうでもいい」

その呟きは、夏の喧騒の中に紛れていったのだった。

第一話"アルバイト";(後書き)

なんだかんだ言いつつ回想が半分くらいを占めていた気がする。世界観は統一されているから早瀬とかももちろん出てくるわけなのです。

実は夏希が剣道部だったし私がペルソナやってた時も剣道部にしてたからちよつどいつか！　なんてノリで出した話題ですが

まあ、逆を返せば早瀬も夏希を知ってるなんてこともあるわけです。ちなみに久遠寺高校は月光館からそこまで離れてないけど学区は違う感じですよ。学区が同じだったら夏希と湊は面識あったかもしれませんね。

それと友達にも聞かれたのですが、本編の湊くんはゲーム時よりヘタレてます。ゲーム時は目的があったり、いろいろ充実していたから。皮肉にもストレガのタカヤさんが言う通りなんですよね、湊くんは。だからこそ、最期は満足して眠れたんだと私は妄想してます。

では、また次回の後書きで会いましょう！

第二話&プロット・キミのじと 私のじと&プロット・(前書き)

長野に向かう新幹線内です。

予め言っておこう！

ジュネスは俺の嫁

であると！(マテ

私も菜々子ちゃんとジュネス行きたいなあなんて思ってた頃がありました。

では、始まり始まり。

第二話 & front・キミのじと、私のじと & front ;

「……」

若干音漏れのするイヤホンを耳に付けて、湊は駅前に立っていた。時刻は待ち合わせの時刻より十五分前。女の子は待たせてはいけないらしいのでその言い付け通り早めに来たのである。もちろん、夏希はまだいない。

「エブリデイ、ヤングライフ、ジュネス」

街頭のテレビでは、最近流行り始めたデパートのCMが流れており、それに視線を向ける。耳に流れる曲が、別の曲に変わった。

「……」

街は、夏の暑さにも負けずに昼間から賑わっていた。夏休みだからか、学生の姿も多い。部活や補習に行くのか、制服姿もちらほらと見かける。

「有里くん」

「……篠原、おはよう」

「おはよう。早いね！」

「女の子は、待たせちゃいけないらしいから」

不意にかけられた声になんとか気づいて横を向けば、そこには私服姿の夏希が立っていた。身軽な湊と違い、やたらと荷物を持っている。イヤホンを外して、彼は夏希の持つ一番重そうな荷物を指差した。

「持つよ」

「え、けど……」

「女の子に、重い荷物を持たせちゃいけないらしいよ」

これも受け売りである。あの、仲間でありクラスメイトでもあった女子生徒の。

「あ、ありがとう」

「気にしないで」

湊とて伊達に戦っていない。これくらいの荷物は余裕だ。ついでに夏希が地面に置いたカバンも持ってやることにする。

「それじゃ、行く？」

「あ、うん。切符は私が買うから電車内で清算で」

「わかった。それと、昼なんだけど……」

「お昼ご飯？ 駅弁でいいと思うよ」

「作ってきたから、篠原も良かったら」

食べる？ と言外に言われ、夏希はしばらく固まった。それからにっこりと笑って、

「ありがとう」

しっかりと湊の目を見て頷いていた。

――
――
――
――
――
――

「けどさ、有里くんってかなり着痩せするタイプ？」

「？ どうして？」

荷物の関係上、お互いに向かい合って座る二人。夏希は湊を見ながら不意にそんなことを言い出した。

「だって、そういう服着ると凄く細いじゃない。くー、羨ましいなあ」

湊の姿は七分の白いTシャツに黒いジーンズ。トレードマークとも言えるイヤホンは首にかかっており、胸元にはネックレスのようにいつもの音楽プレイヤーがぶら下がっている。その身体は全体的に細く、病気なんじゃないかとすら思わせる。

「ちゃんと食べてるの？」

「食べてるよ。けど、僕小食だから。作るので結構満足しちゃって」

「なるほど……けど、細いし肌も白いし、女装とかしたら似合いそ
うだよね」

「そんな趣味はありません」

笑顔でそんなことを言ってくる夏希に湊も困ったように笑った。
そついうのは順平の担当。なんて心で思いながら。

「そついえば、有里くんも健二くんと同じマンションに暮らして
るんだよね？」

「ほぼ一人暮らしって言ってたけど、ご両親は共働き？」

「ううん。十年前に事故で死んじゃった」

「あ……その、「めん」」

「大丈夫」

その表情は無理をしてるようではなく、本当に大丈夫そうだった。

けれど夏希は罪悪感が抜けないらしい。困ったな……と湊は思考し、チラリと時計を見た。

「お昼、食べよう」

「え？ あ、もうそんな時間!？」

「うん」

カバンからおかずの入った弁当箱を取り出して、備え付けのテーブルに並べていく。

——いい時間帯で良かった。とホッとため息を溢して。

「わあっ、美味しそう!」

「予定してた時間に起きれなかったから、手抜き気味だけど……」

口調こそ変わらないが、恥ずかしいのか視線を夏希から離して弁当箱を並べていく。ちゃんとゴミは捨てられるように発泡スチロールの箱にしてあり、ご飯の代わりにおにぎりが用意されていた。

「梅とおかかと塩だけど、好き嫌いは大丈夫?」

「もちろん」

「なら良かった」

いただきます。と同時に言っておにぎりを取り出す。一口口に運んで、

「美味しい!」

「って言っても、ただのおにぎりだよ」

「それでも美味しいよ。それにこんな風に綺麗に三角形作れないし」

「そう、かな」

頬を人差し指で掻いて、夏希から視線を外す湊。どことなく恥ずかしそうな顔をしており、照れてるのかな？　なんてちょっと下から覗こうとして――

「どっしたの?」

「え？ あ、えっと」

目が合ってしまった。首を傾げて不思議そうにする湊に、慌てて夏希は視線を違うところへ向ける。

「その、そう！ これ、いつも使ってるなあと思って。有里くんってどんな歌を聴くの？」

「えっと、多分言ってもわからないと思うよ」

「そう？」

「うん。とてもマイナーな歌手だから。前の学校でも、誰も知らなかったし」

音楽プレイヤーに手を触れて、口元を笑みのカタチに変えながら湊は窓から外を見ていた。

「聴かせてもらってもいい？」

「いいよ。ただし、」

そう言うと、湊は今度こそ笑顔になって夏希の顔へ向き直った。それから弁当箱へと視線を向けて、

「音楽を聴くのはご飯を食べてから」

そう言うっておにぎりを口に放り、ペットボトルの草原日茶を飲んだのだった。

—
—
—
—
—
—
—
—

「うちそうさまでした」

「お粗末様でした」

弁当箱を一つのビニール袋にまとめて入れると、湊は胸元にかけた音楽プレイヤーを外し、しばらく操作してから夏希へと差し出した。

「はい。一応、僕の一番好きな曲にしてあるから」

「あ、ありがとう」

音楽プレイヤーを受け取った夏希はイヤホンを自分の耳に当てて、再生のボタンを押したのだった。

「洋楽……？」

「歌ってるのは日本人だよ。その歌が英語なだけ」

そうなんだ。と言うと夏希は音楽の中に入っていく。目を瞑って小刻みに肩を揺らす姿など、とても様になっていた。

「……情性、だけど」

あの頃のような忙しさはない。使命感も、認めたくはないが、充実感も。でも、この平穩はなんとなく好ましかった。”生かされていく”とも感じるが、それはむしろ去年の出来事が異常過ぎて自分がそれに慣れてしまっていたからなんじゃないか、とすら思う。何物にも変えられない大切な記憶だけど、この今も実はとても大切なのではないかと。

「夢、だったりして」

自分は間違いなく死んだ。けれど、生きている。納得はできていないが、そうなってしまうのだ。

「……どうでもいい」

とりあえずは、これと言えるくらいに余裕が持てるようになったのだから。

「わ、今度は日本語の曲？」

「……えっと、そうだね」

好印象だったのは、夏希の表情を見ればわかった。自分が好きなモノを人に共感してもらえるのは嬉しい。それは湊とて例外ではない。だから湊も顔を綻ばせていた。

あの日に物理部の部室で知り合ってから、湊と夏希は教室で話すことがいくらか増えた。湊は転校生だし、夏希は生徒会長だからなんらおかしくはない。事実、夏希は比較的一人行動の多い湊を心配してはいたので自分が率先して話せば変わるんじゃないだろうか、なんて思ったりもしていた。

実際、夏希効果なのかはわからないが昼休みにクラスメイトと共に

昼食を取る湊の姿を見かけることも多くなり、それは成功と云ってもいい。

湊も、夏希に対して友好的だった。それは夏希が可愛いから、とかではなく（そうだったら今ごろ彼は何股かけていたかわからないだろう）ただ単純に自分に話しかけてくれる存在だったからだ。話下手で聞き上手、拳句に無愛想と思われがちな湊は自分からあまり親しくない人に話しかけるのは苦手で、逆に知らない人に話しかけられても困惑するのは最初のみで、次第に相手と会話をすっかり成立させることができる。

人の話を聞くのが好きな湊は、こうして能動的に話しかけてくれる夏希に対して嫌な感情など出すわけがなく、むしろ助けられていた。長い間転校を繰り返して出来上がった性格だ、直したくても上手くいかないのは仕方ないだろう。本人もずっと前から気にしているところである。

「ありがとう、有里くん」

「え？ あ、うん」

夏希の声で思考の海から引き出され、湊は夏希から音楽プレイヤーとイヤホンを受け取り、定位置に戻した。

「二曲目のは凄くいい曲だったけど、なんか凄い切なかった。まるで、死んじゃう人に向けての歌みたいな……」

「そうだね。たぶん、そういう歌なんだと思う」

目覚めてから聞けば、まるで自分のようだと思ってしまったくらいだ。

そう思うと、やはりこれは夢か何かじゃないかと思う――

「有里くん？」

「え？ あ、ごめん。ちょっとぼろぼろとしてた」

「もう、大丈夫？」

「大丈夫だよ」

小首を傾げて聞いてくる夏希に内心ため息を吐きながら返して、湊は草原日茶を再び口に含んだ。
どうにも考え込むのが癖になりつつあるらしい。気をつけよう。なんて思いながら。

――
――
――
――
――
――
――
――

「そういえば、有里くんは普段どつやって勉強してるの?」

「どつやってって、どつやって?」

「それは私が聞いてるのっ!　なんで授業中寝てるのにテストの平均点が90点代なのよ」

「それは……重要なところは聞いてるし、ノートも取ってるから」

「あとは?」

「テスト期間中に復習してるよ」

知る人ぞ知るが、湊は頭が良い。転校したての久遠寺高校での中間と期末考査で平均点90点代を叩き出し、文句なしの学年一位を取っていた。

「そ、それだけ?」

「あっ」

授業中は寝たりしている湊だから、何か特別な勉強法でもしてるのかと思えば、実に基本的な勉強方法だった。

「まさか、そんな普通の勉強方法だったなんて……」

「何事も、基本が大事だよ」

「基本だけでそんな点数取れないよ!」

もう！　なんて言いながら膨れっ面で湊を睨み夏希は紅茶を飲んでいた。

「……でもさ、有里くん、学校でももつと話せばいいのに」

「それができればいいんだけど……苦手だから」

「苦手?」

困ったように頬を掻く湊に、夏希は膨れっ面を直して向き直る。うん。と湊は頷いてから、夏希から視線を外した。

「人と話したりするの苦手だから。自分を前面に出すとか、そういうのも」

「あ、それはなんとなくわかるかな。ちょっと健二くんに似てるかもって思ったことあったから」

「うん。直したいけど、こつこつ性格になっちゃったから」

こればかりはどうでもいいとは言えないけど、と内心で付け足して湊は微笑んだ。

「まだ、直せるよ」

そんな湊に、夏希は呟くように言ったのだった。

—
—
—
—
—
—
—

「まだ、直せるよ」

「え？」

「まだ直せる！ こうやって私と話せてるんだから大丈夫！」

身を乗り出して湊に訴える。この有里湊に対して、基本的に友好的な好意は抱いている。でも、こういう諦めたような、どこか達観したところは好きではない。

あの虚無感のある瞳も嫌いだ。だから、そんなことはないと否定する。自分が嫌だからなんていう酷く我儘な理由かもしれないが、けれど本人に少しでも直そうとする意思があるのなら、それは後押ししてあげるべきだと思っている。あの大好きな曾祖母のように。

「諦めるのはまだ早いよ、有里くん」

「……そっか。そうだね」

瞬間、湊の顔が綻んだ。普段無愛想だからかそれはずいぶんぎこちないが、それでも可愛らしい、少し幼さの残る笑みだった。

【まもなく——】

「あ、もう着くみたい」

「うん。——篠原」

「なに?」

「ありがとう」

そう言っつて荷物を持つと、湊は出口に向かっていく。慌てて自分の荷物を持って、夏希も湊の後を追っていた。

「そつだ、有里くん」

「なに?」

「さっきの曲の名前、なんていうの?」

ドアが開き、二人は新幹線を降りた。そのまま改札へ向かう中、夏希の隣に並んだ湊は前を見ながら、

「Burn My Dread」と「キミの記憶」だよ

夏希に聞こえる程度の声量で呟くように言ったのだった。

第二話"・キミのこと、私のこと"・(後書き)

……この夏希先輩、ちゃんと夏希先輩やってる？

なんだか書いてるうちに本来の夏希先輩からかけ離れて来ちゃって
ないかってちよっぴり不安になってたり……

それを言えば湊くんもなんです……

まあ、そこも含めて生暖かく見守ってくれると嬉しいです。

さて次回からはついに陣内タイム！

そして伏線タイム！

ただでさえペルソナ知ってる前提なのに余計わかりづらくしちゃう
気満々ですが、ちゃんと伝えられるよう頑張ります！

では、次回の後書きで会いましょうっ！

第三話 & front・front & front ; (前書き)

はい、やっと陣内さん家に到着です。

って言うても、そこまでキャラを動かせないかもしれないので先に謝っておきます。ごめんなさい。

では、始まり始まり。

第三話 " よういそ " ;

「……ホントなんだろうな」

「もちろん。むしろそれはこちらのセリフだよ。キミのAIはこの金額に匹敵するほど優秀なんだろうね？」

「当たり前だ。お前も見てただろうが」

「これは失敬。ならば、商談は成立だ」

ガチャリと扉が開いて足音が遠ざかっていく。
完全にそれが聞こえなくなってから、男は煙草に火をつけた。

「……俺は、悪くない」

不意に着信音が鳴り、メールを受信する。それは、指定された口座に金が入ったことを教えるものだった。

「……俺は悪くない。これで、これで恩が返せるんだ」

その言葉は、煙草の煙と共に宙へと霧散していった。

—
—
—
—
—
—
—
—

「……」

なんだから、去年の夏にも同じような経験をした気がする。と湊は目の前の建物……と言っか屋敷を見て内心で呟いた。

「会長って、こういうのがデフォルトなのか……?」

「何か言った?」

「……いや」

言葉に出てしまっていたらしい。いや、けど広すぎる。桐条の別荘の和風版だ。と好奇心を隠せないようで、湊はキョロキョロと辺りを見回していた。

「どっしたの？」

「いや、だって……広すぎ」

「あははっ。確かにびっくりするよね！ 私も最初はびっくりしたよ。あ、ここが栄おばちゃんの部屋」

そう言われて、さすがに失礼だろうとイヤホン一式を外してカバンにしまう。その奥底には、召喚器が入っていた。

「ーシャドウなんて、出るわけないのに。」

自分でもわかっているが、やはりお守りなのだろう。苦笑するだけで、彼はカバンを閉じていた。

「あとね、栄おばちゃんの前では、何があっても私に話を合わせて。これもバイトの仕事だから」

「??? わかった」

なんだろう。とは思うものの、湊はひとまず頷いた。何かあるんだろ。と人のいい彼は夏希に一切疑いを持たず、彼女に続いて部屋へ入って行く。

直後、言葉の意味を知ると共に、後悔するとも知らずに……

——
——
——
——
——
——
——

「栄おばちゃん！」

「夏希かい。おかえり」

「ただいま！」

二人はいくつか言葉を交わし、その度に笑顔を作り出す。本当に仲が良いんだなあ。なんて思いながら、湊は静かに正座をしていた。

「それでね、おばあちゃん。彼が——」

「有里湊です」

内気ではあるが、アガリ症ではない。湊は臆することなく栄の顔を

見て自分の名前を告げ、ペコリと頭を下げた。

「はきはきとしたいいい人だね。それで、夏希……この人が？」

「うん」

二人の会話に少し首を傾げる。アルバイトもとい、手伝いで来たと伝えていなかったのだろうか。そんな考えは、一瞬で打ち碎かれる。

「私の彼氏」

「っ!？」

声を出さなかったのは奇跡と言ってもいいだろう。必死に平静を装い、隣の夏希へ視線を動かす。栄の視線が湊に向いてるのをわかっているのか、夏希はウインクをして返してきた。

……やられた。

後悔してももう遅い。栄は自分へとしっかり向き直り、ジッと目を見つめてくる。

「湊さん……と言ったね」

「……はい」

「あんた、うちの夏希を幸せにする気はあるかい？」

一年前、寮のテレビで女子陣が見ていた恋愛ドラマを思い出す。
アイギスが「なるほどな」なんて言いながら見ていたが、湊は終始どうでもいい内容だった。だが、まさかその立場になるなんて誰が思うだろうか！

「……どうでもいい、とは言えないか。」

言えたらどんなに楽だろう。と内心で盛大にため息を吐く。むしろ、部屋を出たら実際に吐こう。なんて思いながら、湊は唾を飲み込んだ。

「……腹を、くくってしまった。」

「……はい」

静かに。けれどよく通るような声で、湊は返事をした。

仮にも命懸けで世界を救ってるのだ。彼の勇気や度胸は本来半端ないほどある。ただし、それが活用されるのは生死のかかった状況や集中してる時、そして腹をくくった時、あとは土壇場くらいなのだ。

が。彼は腹をくくってしまった。

「きつと、夏希さんを幸せにします」

そして、言った。篠原と言わなかった辺り自分でも驚くが、この状況で手も震えない自分に呆れる。どうして普段からこうにはできないのか、と。

「……そうかい。うちの夏希は少し世間知らずで我儘だけど、とてもいい子なんだ。良くしてやってくれ」

「はい」

にっこりと笑う栄に、頷き返事をする湊。隣の夏希はと言えば、湊がここまではつきり演技できるとは思わず、内心で驚いていた。

——
——
——
——
——
——
——

「……………はあああ」

「凄いよ有里くん！ まさかあんな完璧に演技できちゃうなんて」

「……とりあえず、もう篠原の誘いには乗らないことにする」

「ええっ!？」 あ、その……隠してのはホントにごめん！ けど、こっちにも事情があつて」

栄はここ最近体調を崩すことが多く、夏希はそんな栄を元氣付けようと婚約を前提に付き合う彼氏を連れてきたわけだ。無論、それが湊なのは言うまでもない。

「だとしても、それが本物じゃないのは悲しいと思うよ。ましてや、僕みたいなやつじゃ尚更」

もう一度ため息を吐く湊。まあ、言いたいことも言えたからいいかと、カバンをかけ直して、夏希へと振り返った。

「荷物、置きたいから部屋に案内してもらえるかな」

「あ、うん」

部屋に向かう途中、湊は自分の経歴に再びため息を吐いた。なんでも、自分はアメリカへ留学経験のある東大生で、旧家の出身らしい。

「……美鶴先輩もびっくりだ」

「何か言った？」

「いや、何も。ところで、僕は何をすればいい？」

「え？ うーん、夕飯の時間まで余裕があるし………そうだ！」

手を顎に当てて悩んでいた夏希はやがて何か閃いたのが、軽い足取りで廊下まで出て行き、

「ちょっと手合わせ。お願いできる？」

人差し指を立てて可愛らしくウィンクしたのだった。

一一一一一一一一一一

「たあっ！」

「っ……」

木と木がぶつかる音が響き、二つの足音が庭に響いた。湊の目の前には、木刀を持つ夏希。そして湊の手にも。

「ちょっとあり——湊くん！　手加減とかやめてよね！」

「……いや、だって」

子供達や大人も幾人か見てる中、仮にも偽にも婚約者に本気を出していいものなのだろうか。そもそも男女間で剣道などしても身体的な差は大きい。ましてや湊は真剣を振るって来たのだ。それこそ本気でやれるわけがない。

「むっ……ならいいよ。面っ！」

垂直に振り落とされた木刀を防ごうと木刀を横に構える。途中で、夏希の木刀の軌道がぶれた。

「と見せかけて、籠手っ！」

それが湊の手に当たろうかという時、湊は動いた。即座に左手を離して柄で受け止め、右手首の返して夏希の木刀を力子上げる。

「あっ」

夏希が声を出したのと、湊の木刀が夏希の目の前に添えられるのはほぼ同じタイミングだった。

「……やっちゃった。ごめん、反射的に動いちゃって」

反射的に動かねばならないほど夏希の攻撃が凄かったわけであるが、夏希は夏希で湊が早瀬に勝ったことがある。と言ったことが嘘でないことを実感したのだった。

——
——
——
——
——
——

「いいか！ 俺はこんなに小さい頃から夏希を知ってたからな」

「……」

「なんか言えよ！」

「……いや、なんて答えればいいのかわからなくて」

「翔太！ 湊くんを困らせるんじゃない。まったく！」

自分に突っ掛かってくる金髪をなるべく無視して、湊は目の前の光景に小さくため息を吐いた。

——さすがに多すぎない？

いい思い出はないが、湊にも親戚はいる。が、こんなにはいなかった。いても困るけど、なんて思うが。

「さ、湊くんも飲んだ飲んだ」

「……すみません、下戸なんです」

未成年である以上、さすがに酒は断ることにする。
成人しても、飲む気はなかったが。

「シシシ、相変わらず賑やかだな。この家はよ」

しばらく賑わってた部屋に途端、静寂が訪れる。
そこには、ボサボサの髪の毛にやや褐色の肌をした、背の高い男が立っていた。

「……侘助」

夏希の親戚の一人、理一が呟く。隣の夏希は今にも立ち上がりたようだが、どうにもタイミングが掴めなかったようだ。

「よう、理一。なんだよ、そんなシケたツラして」

部屋に上がり、一つ貰うぞ。とビールを開ける。それを一気に飲んで、侘助は息を吐いた。

「……ダメだな、やっぱり日本のビールは不味い」

「侘助」

次は栄の声。全員の視線が栄に集まった。

「夕飯は食べたのかい？」

「……いらねえよ」

会話はそれつきり。次第にまた宴会状態の賑やかさを取り戻していくが、湊の視線は侘助に向けられたままだった。

「お兄ちゃん、こいこいやろう!」

「こいこい?」

「あ、もしかしてこいこいしらないの?」

「いや、知ってるよ」

真悟、祐平、加奈の三人に集まられて、湊は思わず苦笑した。舞子よりは年下だろうが、とにもかくにも、自分はこの手の子にとつて話しかけやすい対象であるようだ。悪い気はしないので、侘助から視線を子供達に移し、縁側へ移動した。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

「よ、婿殿」

「……どうも」

こいこいの最中、湊の背後から侘助が現れていた。先ほどまでいた直美の話では、夏希は幼い頃に侘助に好意を持っていたとか何とかか

「僕が、どうかしましたか？」

「いや、なんだか大人しそうなヤツだからこの賑やかさに耐えられてるのかと思ってな。ま、あまり気にしないでくれ」

「そう、ですか」

「お兄ちゃん、まだあ？」

「あ、ごめん」

催促されて、札を出す。三対一だが湊は高校三年生。対して相手はかなり小さい子供だ。かなり手加減して互角といたところである。侘助もそれがわかったのか、シシシ。と笑った。

「優しいな、婿殿は」

そんな侘助に、湊は顔を向けて、同じように笑ってやった。

「あなたも」

「ん？」

「あなたも、優しいんですね」

それは、どこかイタズラをした子供のような、そんな口調だった。

「俺が優しい？　面白いこと言っじゃないか、婿殿は」

そんな湊に、驚きながらも侘助はニヤリと笑ってそう返した。ありえない。と言外に語っている。

「僕の心配をしてくれましたから」

「……は、そうかい」

面白いやつ。なんて言いながら侘助は自分の所から去っていく。そんな背中を見送って、湊は再び目の前の花札に意識を戻すのだった。そして、そんな二人を、栄がどこか嬉しそうな目で眺めていた。

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

「……疲れた」

布団に倒れ、小さくため息を吐く。影時間で戦っていた時とは違うベクトルの疲労が湊に襲いかかっていた。主に精神面で。

「……」

一人になると、やはり思考の海に沈んでしまう。しかし、今回は…
…いつもと違うところについてだった。

「ゆかりや風花、美鶴先輩だってあんな無茶しなかったぞ……」

思い出されるのは、篠原夏希。まさか、こんな偽装彼氏をやらされるとは思わなかった。佐久間辺りが聞いたらゲラゲラ笑ってからかって来そうだ。

けれど、とんでもない人。と言われればそうでもない。自分の胸の内なんて話したのは、下手をすれば彼女が初めてだ。

一年前はそれどころじゃなかったし、自分と仲間はそうでなくても意志疎通ができていた。改めて、あの時は日常に余裕がなかったのだと自覚する。

「頑張る、か」

やれるなら、やってみようと思う。とりあえず、どうでもいいで片付けてはいけない当面の問題その一だ。二学期からやってみよう。と決意を新たにした。

「それと、似てたな……」

もう一人、思い出されるのはあの乱入者。陣内侘助。

反応も、ベクトルもまるで違う。だが、雰囲気似てるのだ、自分の親しかった先輩の一人に。だから、優しいんですね。なんて同じ質問を試してみた。あの先輩も、言葉遣いは悪いし目付きも悪かったが、仲間想いの優しい人だった。優しい人だったからこそ、命を落としてしまった。

「……ん？」

着信音に意識を海から引き揚げられる。携帯の画面には湊のアバターである片目が髪に隠れた犬耳少年が手紙を持っていた。

「メール？　OZから？」

こんな時間に？　なんて疑問に思いながらフォルダを開くと、件名には英語で「私を解いて！」と書かれたメールが一通。中身は大量の数字が入っていた。

「……さすがに無理だろ、これ」

こんな桁の数字、解けるわけがない。自分は勉強ができると言っても、あくまで高校生の範囲内だ。こういうのは専門家に……

「あ、いた。専門家」

メールの転送を選択し、宛先を決める。
その名前は、小磯健二。

「来てるかもしれないけど、まあいいや」

メールを送信。数分後、健二から電話がかかってきた。

「先輩のところにも来たんですか？」

「うん」

「なるほど、けど変ですね。僕の問題が違います」

「そうなの？」

「はい。さっきからいくら送ってもエラーで返って来て……せつかくなんでこっちもやってみますね」

「わかった。……小磯」

「はい？」

「お母さん、帰って来た？」

「！ はい。今日は外食だったんですよ」

「そっか。じゃ、また」

「はい。おやすみなさい」

通話を終えて、湊は息を吐いた。健二が嬉しそうに話していた以上、強がりの嘘でないことは確かだ。少し、ホッとする。

「けど、これはなんだったのかな」

よく理解できない、大量の数字。それは、OZからの何か出題だろうか。

「……どうでもいいか」

眠くなってきた頭で思考しても意味ないと考えたのか、湊は目を瞑り、すぐに寝息をたてていた。

第三話"e;よじろ"e;;(後書き)

伏線もお遊びも入ったこの回、どうでしたでしょうか。

書いてた私が言うのもアレですが、湊クンと侘助オジサンのやり取りはなかなか気に入ってます。

誰に似てたって言うてるかは、わかりますよね？

冒頭部分も、実は伏線です。会話してる相手が誰かわかる人がいたらその人は神か悪魔か……です。

さてさて、次回からは遂にヤツが動き出します。

そして、みんなお待ちかね(かはわからないけど)のリーダー復活！ の予定です。

湊クンのかっこ良さを表現できるよう頑張ります！

ではでは、次回の後書きで会いましょう！

第四話&groot…できるじと&groot…(前書き)

遂にあいつの登場回です。

ここから徐々にオリジナル色が強くなります。え？　もう強いつて？

……ごめんなさい。

と、とにかく。始まり始まり。

第四話 & quot; できること & quot; ;

「……」

奇妙な仮面をつけたソレに、湊は左手に持った”ソレ”をこめかみへと当てた。

「行け」

躊躇うことなく引金を引いて、心の海に眠る自らの半身……写し身を召喚する。

真っ暗な部屋で、その証が青い光を纏い、かえってそこに不気味な雰囲気醸し出していた。

「なんだって……」

そこまで言っただけだった。この暗い部屋は部屋ではないと。四方八方を全てヤツらに囲まれた、絶望的な状況なのだ――

「っ!?!?」

飛び起きる。とは正にこのことだろう。見回せば、そこはマンションの自室ではなかった。ゆっくり、昨日の記憶を思い出していく。

「……夢、か」

あんな悪夢、今になって見るなんて。と思う。もうシャドウはいないのに、あんな量のシャドウに覆われる夢を見た。寢覚めはかなり悪い。珍しく機嫌も悪いと自覚できた。

「死ぬって、怖いな」

あの絶望的な感覚が死なら、よく自分はアレを覚悟したと思う。もう一度やれと言われたら……やるだろうけど、なんて思いながら完全に目を覚ました湊は寝間着から私服へと着替えることにした。この時、湊が部屋から出ていけば、もう少し早く事態が呑み込めたかもしれない。けれど、それはあくまでイフの話であり、

「翔太兄！　これはきつと誤解よ！」

「しつこいぞ夏希！　もう指名手配されてんだからな！」

だから、目の前に使命感に満ちた金髪警官と、少し泣きそつにすら見える夏希が現れたことに、湊の思考は追い付かなかった。

— — — — —

「夏希！ まさか人様に迷惑をかけるなんて……」

「でも……」

「そんなことされたって私は喜ばないよ。まったく」

手に手錠をかけられた状態で、湊は目の前の出来事をただ眺めていた。夏希は怒られてシユンとしているが、湊の心は正反対のことを考えていた。

「ちよつと、羨ましいな」

「羨ましい？」

隣にいた少年に返されて、湊は小さく頷いた。見れば、自分のように片目を髪で隠している。寮にいた頃は、それぞれが家庭環境に問題あった為に触れなかったこと。けれど、みんながみんなを助けていたから感じることもなかったことだった。

「叱ってくれる人がいるって、幸せなことだから」

亀裂が入りそうなことなんて、いくらでもあった。その度にみんなぶつかり、みんなで乗り越えた。けれど、自分は何をしていただろう。ただ、みんなを受け入れて、最善を探していただけ。叱ることも、叱られることもなかった。知らず、リーダーだからと常に行動に気をつけていたのかもしれない。終盤は、自分が間違っことを特に恐れていた。

「家族でも、友達でも……」

あの死は満足しての死だった。けれど、今の自分は死ぬにせよ、未練を引き摺るんじゃないか、と少し怖かった。

ましてや、ここは自分の知らない環境だ。両親を亡くし、親戚にやつかまれ各地を転々としてきた湊には、とても理解できない場所である。だから――

「だから、羨ましい」

少年は、湊の独白をただ聞いていた。そんな彼の目の前に金髪警官が現れる。

「行くぞ、愉快犯」

「の前に、僕の罪状はなんですか？」

「ああ？ そんなの、」

なんでも、自分はネズミのアバターをハッキングして強奪し、更にはOZ内で様々なハッキングを繰り返しているらしい。
チラリと携帯を開けば、湊のアバターであるミナトは健在だ。ネズミのアバターは、おそらく健二のものか。しかし、自分が無実と言えるものはどこにもなく……

「……どうでもいい」

「良くないっ！」

まあ、いいか。なんて思って呟いたら、近くに來ていた夏希に怒鳴られた。

驚いて、湊は夏希から少し後ずさる。

「どつでもいいなんて言ってる、どつじて諦めるの！？」

「証拠がないから」

「それでも、ホントに無実なら諦めないですよ！ 有里くんのこと信じてる人だっているのに！」

「……………僕を？」

誰が？ なんて聞き返そうとして、着信音に邪魔される。
ディスプレイに映るのは、眼鏡をかけた猿のアバター。

「佐久間……………？」

出てもいいですか？ と尋ねれば翔太は掴みかかって来そうな勢いで顔を寄せようとして……………頷いた夏希に突き飛ばされた。

「……………もしもし」

「あ、湊先輩？ あの、先輩ってAIとか作れました？」

「バカを言わないで。僕にそんな技術があったら佐久間や小磯と一緒にアルバイトしてるよ」

「ですよー。よし、これで言質はとったし信じてた通りだ」

「？ 佐久間、どういう……」

「湊先輩の無実をOZ上層に伝えて来ます。犯人は、ハッキングA
Iでした」

「……は？」

「詳しくは後で。とにかく今は先輩の無実証明です」

一方的に通話を切られ、湊はポカンとなってしまう。
どう反応すればいいかわからない。わからないが、目の前の夏希は
何故か嬉しそうにしていたのだった。

一一一一一一一一一一一一一一

「ま、これで湊くんにはOZと警察から謝罪が来るだろうね」

「えっと……まだよくわからないです」

「要するに、キミは無実だった。そうだろうか？」

「まあ……寝てましたから」

うん。と理一は笑って、それからテレビに視線を移した。釣られて湊もテレビに視線を向ける。そこには自分が犯人とされたのは誤報であることと、この混乱によるたくさんの被害が速報で流れていた。

「おじさん達も出さずっぱりだし……」

「……」

夏希の眩きには答えず、湊は思考した。

とりあえず、現状を理解したかった。その為には、やはり佐久間に連絡をするべきなのだろうと思う。

そう思い、夏希に一言告げた湊は居間を後にしたのだった。

「今こそやる時なんじゃないのかい！」

廊下を歩いていると、張りのある強い声が飛んで来た。

見れば、栄が黒電話を目の前にいろいろ話していた。そこには様々な封筒が置いてあり、電話番号が書かれている。

「次は……よし」

再び黒電話を回し、栄は電話をかける。
その姿を、湊は眺めていた。

「……ああ、うん。あんたも忙しいのはわかってる。お父さんがあんなことになっちゃって大変なのもわかる。けど、力を貸してくれないかい？　そうさ。さすがだね。ダメな年寄りよりも頼りになるよ！」

うん、アンタならできる。大丈夫！」

「……」

音を立てずに歩き去る湊。不意に封筒が栄の机から落ち、そこには
”桐条”と書かれていた。

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

「……どうでもいいって、言えないじゃないか」

ひとりごちて、湊は夏希に声をかけた。やれることはあるかわからない。けれど、動かなければいけない。栄の声には、湊を動かす何か”が宿っていた。

「篠原」

「有里くん？」

「昨日の……パソコン使ってた子ってどこにいる？」

「パソコン使ってた子？」

「そう。片目が隠れてる……」

「もしかして、佳主馬のこと？」

「たぶん」

「わかった。ついて来て！」

パソコンが手元になれば行動すらできやしない。

夏希についていく傍らで、携帯電話を開いておく。こんな時でも繋がるなんて、さすがはOZだろうか。なんて思いながら電話帳を開き、さ行のところ为先頭にある名前にカーソルを当てて、通話ボタンを押す。

「先輩？」

「今からログインするから、詳しく話してもらえる？」

なんとなく、自分にはできる。湊はそんな気がしていた。

—
—
—
—
—
—
—

「……なに？」

「パソコン、借りていい？」

「いいけど……今のOZはちょっと混乱してるよ？」

「別にいいよ」

ログインをして、先ほど佐久間と打ち合わせた場所へ飛んで行く。そこには眼鏡をかけた猿と、奇妙なTシャツを着たリスが立っていた。名前欄には”仮ケンジ”と書かれてある。

「それ、有里くんのアバター？」

「そうだよ」

「……なんか、有里くんらしいね」

夏希の声には笑いが含まれていた。こんな非常事態にも関わらず眠そうにあくびをするミナトが面白かったのだろうか。

「湊先輩！　待ってましたよ！」

「ごめん。それで、どうして小磯のアバターが僕にハッキングされたことになったの？」

「それが、昨日先輩が送ってくれた問題がOZのセキュリティの番号だったんです。僕のところに来てたのもそうだったんですけど……時間が遅かったから」

「……番号が変わってた？」

「はい」

OZのセキュリティは非常に高度で、二千桁を超える数字を数時間ごとに変えて行われている。

つまり、健二の所に来てた番号は既に変えられており、それが湊の所に来たメールだったのだろう。

「それを健二が一番最初に解いちゃったもんだからアバターをパクられて、しかも発信源の先輩が疑われたってわけです。アカウント自体はその時にもう五十五個奪われています」

「わかった」

「それで、どうするんですか？」

「……小磯のアバター、そのAIを叩く。可能なら破壊する」

全員が息を呑むのがわかった。通話してる向こうから健二と佐久間が同じような反応をしたのも。けれど、湊は構わず続けた。

「なんであれ、僕が原因の一つだ。なら、関わるよ。力を、貸してもらえる?」

「あ、当たり前っすよ!」

「僕なんかで良かったら、いくらでも力になります」

「ありがとう」

「けど湊先輩、どうやって叩くんですか?
僕ら、戦闘なんかできませんよ」

「それは僕もだけど……そこはランキングに載ってる人にでも協力してもらっよ」

「そんな行き当たりばったりな……」

「……ごめん」

そこに関してはもう何も言えない。頭が回らなかった自分の責任だ。

「なら、」

「え？」

不意に、三人しかいない場所にアバターが一人加わる。

ミナトのように片目を髪で隠した、ウサギのアバター。OZをやる者ならば、例え湊のように疎い者でも名前だけは知ってる存在の、その姿が。

「その戦闘は、俺がやるよ」

「「キングカズマ!？」」

「……キミだったんだ」

「そういうのは後。作戦、あるんでしょ」

無愛想に答える佳主馬に、湊は頷いた。

それから一回目を閉じて深呼吸。

「——大丈夫。あの時は自分が原因で世界が滅びかけたんだ。それに比べたらこんなの気を負うだけバカみたいじゃないか——」

左手の人差し指をこめかみに当てる動作をして、目を開ける。隣には自分を見る夏希がいたが、気にしている時間はない。大丈夫やれる。

その瞳は、影時間を駆け抜けた時の、戦う為の瞳だった。

「――作戦を始めよう」

ニヤリと笑いすら浮かべ、湊はパソコンのディスプレイに呟いたのだった。

――
――
――
――
――
――
――

「酷い状況だね」

「これもハッキングされた影響みたいですね」

湊と健二の会話を他所に、夏希は湊の顔を見つめていた。普段の虚無感に満ちた目ではない、強い意思の込められた瞳。口元には余裕があるのかやや笑みを浮かべており、変わらないのは口調だけ。雰囲気は、ガラリと変わっていた。

「噂が大量に流れてるから、見つけるのは簡単そうだね」

「うん。見つけたら、僕と小磯でバトルフィールドへ誘い込む。そうしたらヤツを、佳主馬が叩く」

「KOすればいいの？」

「それでいいよ。それまでに佐久間がOZに掛け合っておくから」

KOされたアバターはしばらく自力では動けない。
だから、その間にOZで補足して捕まえる。内容としては実に簡単で、かつ隙のない物だった。

「信用できないかもしれないけど、指示を出すからそれに従って欲しい」

「なに言ってんスか。先輩の作戦に穴はないし、もっと偉そうにしてくださいよ」

「そういつこと。湊さんがリーダーなんだから」

「……ありがとう」

リーダー。その言葉が湊にはとても似合うような、夏希はそんな気がしていた。

「いたよ」

「っ！」

慌てて視線を湊からディスプレイに戻す。そこには健二のアバターだったモノがポツンと立っていた。健二に似て可愛いはずのアバターが、凶悪な笑顔でこちらへ笑っている。

「あ、あのー」

ややへっぴり腰で近づいて行く健二こと仮ケンジ。その後ろをミナトが歩き、警戒しているのか尻尾を逆立ててネズミを睨んでいた。更に背後にはサクマとカズマが控えている。

「四の五の言うつもりはない。かかって来なよ」

「せ、せんぱいっ！あっ……」

「――作戦に、穴はなかった。でも、その根本が違ったら？
全フロアが、バトルフィールドに変わってしまったら？
そうしたら、どうなる？」

「健二！？　くそっ！　先輩、全フロアがバトルフィールドに
書き換えられてる！」

「っ……作戦変更しよう。佳主馬、ここでアレを叩く。いい？」

コクリと頷いて、湊はパソコンの正面からどいた。すぐに携帯操作
に変えてパソコンディスプレイを覗き込む。

「かー、さすがにつえーなキングは」

「そうだね」

乗っ取っているとは言え、その元は所詮健二のAvatar。OMC
の頂点に君臨するキングガズマには勝てるはずもなく、KOはもう
時間の問題と思われた。

「あ、逃げたよっ！」

「追いかける。小磯と佐久間は深追いしないで。佳主馬は先に」

「わかった」

ネズミの向かう先は、OZのメインフィールド。ロビーとも言われる場所だった。

そこにはたくさんのアバターがおり、事態についてあることないことをチャットしていた。

もちろん、彼らはここがバトルフィールドに変えられているなどわかるはずもなく、だからただ話すことしかしない。そこへ、ネズミが着地した。次いでカズマ、更に遅れてミナトやケンジ、サクマが。

「おい！ キングがいるぞ！」

「っ！ 邪魔だっ！」

ネズミはシシシ。と笑ってアバターの群れに飛び込む。
次の瞬間、悲鳴が広がった。

「っ、このネズミ俺の友達のアバターを喰いやがった！」

「私の妹のアバターもよ！」

「な、なんだよこいつ！」

アバター達が遠退き、カズマの目の前にネズミがいた。そいつは半分口の中に入れていたアバターを丸呑みすると、再びシシ。と笑う。

「アバターを、喰った？」

後頭部辺りに後光が現れ、その姿が歪む。まるで書き換えられているかのように数字のモザイクがかり、

「……なんだよ、これ」

「OZのアバターの大きさじゃないよ、こんなの」

佐久間と健二の呟きは当然と言えた。何故ならば、それはOZのアバターにはあり得ない高さの長身に上半身裸で刺青のようなモノが入った、認識不明の存在になっていたからだった。

カズマの知る中で最も巨体なライオンのアバターよりも、更に背が高い。

「佳主馬、少し様子を見よう」

「っ……大したことないよ、こんなやつ」

「待って！」

湊の制止を振り切り、カズマはソレに突っ込んでいく。

軽快なフットワークから放たれる蹴りは簡単ちガードされ、がら空きの頭へパンチが綺麗に直撃した。

「なっ……」

今までの戦闘で、自分の攻撃をカウンターされたことなどなかった。だから、佳主馬はその攻撃に硬直をしてしまう。それは、多大な隙を相手に与えるのと同義であり、

「1 moreされたっ！」

聞きなれない湊の単語で佳主馬が画面を見た時には、既に自分のアバターがタコ殴りに遭って地面に倒れ伏しているところだった。頭上にKOのマークが出ている。

「そんな……」

「先輩！ あいつキングのアバターを喰う気だっ！」

「わかってる！」

ゆっくりとカズマに近づくとソレよりも早くミナトはカズマに近づき、抱き上げる。

「……まだ、終わってないから」

それだけ告げて、ミナトはカズマと共にログアウトしたのだった。

——
——
——
——
——
——
——

「計算外だった。まさか、全フロアがバトルフィールドに書き換えられてたなんて」

「……それと、アレがアバターを食べることもね」

「有里くん、佳主馬、大丈夫？」

「……」

「大丈夫」

夏希の言葉に答えない佳主馬と、やはり薄く笑みを浮かべる湊。
楽しそうには見えないが、その瞳にはやはり強い光が宿っていた。

「生きてる限り、負けはないから」

はっきりと、その場にいる全員に聞こえる強さを持って、湊はそう
答えたのだった。

第四話"・できること"・(後書き)

やっぱり湊クンは戦う時にかっこよくなってしまっただけですね。

冷静に、けど仲間にとっての最善を常に考える。

健二みたいな計算力はないけど、単純に作戦を考えるならサマウオメンバーで湊クンに勝てる人はいないと思います。個人の戦闘能力もですが

ちょっと夏希先輩が空気気味だったのと、もっと陣内の皆さんを出したいところ。ここ反省ポイントです。

では、次回の後書きで会いましょう！

第五話 " 意思 " ; (前書き)

気がついたらPV5000越え！

超びっくりして思わず携帯落としてしまいました

こんな小説でも読んでくれる人がいて凄く嬉しいです。改めて、ありがとうございます。

では、始まり始まり。

第五話 " 意思 " ;

「ほらほら何を遠慮してるんだい湊くん。さ、食べた食べた」

「……いや、でも、僕は偽装された相手だったわけだから……」

「夕飯の手伝いまでしてもらってるのにそんな冷たい真似なんてしないって。ひよろっちいんだから食べなさいよ」

太助と直美の二人にそう言われ、湊は遠慮がちに箸を取った。が、翔太の「お前に食わせるメシなんてあるか！」という声に再び箸を置いてしまう。

「翔太！ そんなこと言うならお前の目の前にある料理には一切手を触れるんじゃないぞ！」

万助の厳しい声に、翔太はう……と小さくなる。それから、なんだけだよ。と返した。

「その料理は全部湊くんが作ってくれたのよ。さすがは一人暮らしね。自炊してるなんて偉い偉い」

「いや……前に住んでた学校の寮で先輩に料理が上手な人がいたから……」

奈々の言葉にそう答え、改めて箸を持つ。皿に料理を置いてくれた佳主馬にありがとうと返して、パクリと口に含み咀嚼する。

「あら、寮なら食堂とかなかったの？」

「ちよつと”特別”な寮だったんで」

苦笑して、またおかずを取って食べる。誰かのご飯を食べることがほとんどない湊にとって、この場所はとても不思議に感じられる場所だった。

「それで湊さん、アレ……どうするの？」

「そうよねえ。あの変なAI……だっけ？」

そののせいで了平の試合も見れなくなっちゃったりで……勝ったから良かったけど」

「そう、だね」

一旦食べることをやめて思考する。おそらく、並のパソコンのスペックではアレには勝てない。キングガズマがカウンターを貰うのだ、伝達速度が違う。そもそも、相手は画面の中において、こちらは画面の外にいる。ならば、この伝達速度の差を埋めなくてはならない。

「無理だよ。アレを押さえるのはな」

「え？」

思考の海から引き揚げられ、その声に振り返る。聞こえたのは、縁側から。

「あいつの名前は”ラブマシーン”。ハッキングAIであり、”好奇心”を持つAIだ」

「……詳しいじゃん」

「当たり前だ。アレを作ったのは俺だからな」

侘助に突っ掛かった佳主馬の目が大きく開かれる。佳主馬だけではない。湊以外全員が侘助を見つめた。

「元々アメリカでの研究で作ってたもんだが……売って欲しいって言ったんで売った。四十億で買っつて言われたからな」

「よ……」

「四十億……」

「……知ってたのか」

「あ？」

「こうなるって、知ってたのかよ！」

「佳主馬？」

「……知ってたさ。けど、それに関して悪いのは俺じゃない。俺は、ただラブマシーンを作っただけだ」

「ばあちゃんならわかってくれるだろ？
へと入っていく。」

と侘助は立ち上がり、中

「悪いのは俺じゃない」

「侘助……」

「恩返しがしたかったんだ。これで、あのじいちゃんが持ってた金よりも大金が入るんだぜ？」

「……嫌な予感がする。」

湊の予感は、的中していた。栄は立ち上がると薙刀を手にして、侘助へと振りかざした。あれは当てる気だ。それがわかったのか侘助も後ろへ下がりがり、テーブルにつまづいてテーブルの上の物をひっくり返しながら尻餅をついていた。

「侘助！　　ここで死ね！」

それは、どれほど鋭利な言葉だっただろうか。湊の目の前にある侘助の瞳が揺らぎ、栄は薙刀を振り落とした。

「……」

誰が、言葉を発せただろう。湊が薙刀の柄を掴み、侘助の眼前で薙

刀を止めていた。

夏希の「有里くん……」という呟きだけが居間に響いた。

「……どんな理由でも、人が死ぬなんてことがあっちゃいけない」

静かに。見かけと同じで年のわりに高い声が全員の耳に響き渡る。

「話し合い、しませんか？」

沈黙。蝉の音が痛いくらいに鳴り響く。

動いたのは、侘助だった。

「……帰って来るんじゃないかった」

「侘助おじさん！」

薙刀の刃を手で掴み、立ち上がる侘助。そのまま湊の後ろを通り、庭へと……玄関へと歩いて行ってしまふ。

「……湊さん、その手を離してもらえないかい？」

「あ……」

雑刀から手を離すと、栄はそれを元あった場所に置いて、それから息を吸った。

「いいかい！ 身内の不始末は身内でつけるんだよ！」

そんな栄を、湊はただただ見つめていたのだった。

—
—
—
—
—
—
—
—
—

「有里くん」

片付けを終えて、廊下を歩く湊を追い越しながら夏希は湊に声をかけた。数歩前に歩いてから、立ち止まる。

「さっきは栄おばあちゃんを止めてくれてありがとうがとね」

「……気にしないで」

「気にするよ。有里くん、ここに来てからいつもの有里くと全然違うから」

「篠原」

「言いたかったのはこれだけ！

……ごめん、ちょっと一人にさせて」

湊が何か言うよりも早く、夏希は歩き出して角を曲がってしまふ。ため息を吐いて、いつもの口癖を言おうとして……やめた。

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

「……もしもし」

「やあ、侘助くん。素晴らしいよ、キミのラブマシーンは！」

相手の声に侘助は顔をしかめた。よりによってこのタイミングでかけて来るのか、この男は。と。元々嫌いなタイプの人間だからか、声がより辛辣なものになる。

「そうかよ。用はそれだけか？」

「ああいや、すまないね。事後報告なんだが、キミのラブマシーンに少し細工をさせてもらったよ」

「あ？」

「とは言っても、保険をかけたただけだけどね。一応報告だよ」

「……勝手にしろよ。ああそうだ、お前の名前……なんて言うんだ？」

特に意味はない。もし騒動が収まればこいつも道連れにしてやろう。それくらいの意味しかない。

「僕の名前？　そう言えば名乗ってなかったか。ふむ、結構言いにくい名前なんだけど、大丈夫かい？」

「はっ、意味はねえから心配いらねえよ」

「ははは、そっかそっか。ならば名乗っておっつ。僕の名前は――」

――
――
――
――
――
――
――

「すまないね、恥ずかしいところを見せちゃったよ」

「いや、そんな」

湊は困惑を隠しきれず、目の前で花札を配る栄に視線を向けた。対する栄は笑顔で湊に笑いかける。

これほどまでに穏やかな視線を受けたことがないからか、湊の瞳の中の困惑は更に広がってしまう。

「私も年甲斐なくカツと来ちゃったねえ。湊さん、アンタ……友達から八つ当たりされたりとかしたことはないかい？」

「あると言えば……」

こういうことに関しての自分の沸点はあり得ないくらい高いようで苛立つことすらなかったが、ないとは言えなかった。

「人が良い上にあんまり動じないみたいだから、仕方ないね。と、それじゃあ始めよう」

「はい」

「して、何を賭ける？」

「……え？」

「何か賭けないと面白くないだろう？」

固まる湊を他所に、栄は「そうだねえ」なんて言いながら花札を丁寧に並べていく。

「……よし。じゃあ、私が勝ったら夏希のことをよろしく願いますよ」

「は……？ いや、だから僕は偽装彼氏だけで、実際には」

「わかってるよ。けど、あの子も安直に選ぶような子ではないからね。それに、湊さんはいい人だからね」

「それは……自分ではわからないです」

「はははっ。それはそうだろうねえ」

会話と同時進行でこいこいが始まるが、二人の視線は基本的にお互いに向けられており、札を出す時にだけ手元を見ていた。

「アンタの目はとても深い。達観してるようにも、全部諦めてるようにも見えるけれど、そうじゃない。正直、何を考えてるかもわからないくらい深い」

「過大評価です。僕は……予め何か考えるなんてできないから」

あの時だつて必死だつた。仲間を死なせないように、怪我は最低限で済むように。

その場その場で必死に考えていただけだ。その結果として、死なせてしまった人だっている。

そんな湊を他所に、栄はまた笑つた。抜けた前歯を気にさせないくらいに綺麗な笑顔だつた。

「過大評価なもんかい。現に、今の湊さんの目はとても強い。最初に見た時は何か燻ってるようだったのが、今は燃え上がってるみたいだ」

「それは……」

否定は出来なかつた。栄の電話でのやり取りを聞いた湊は既に”腹をくくつて”いる。

腹をくくつた湊は、一年前を駆け抜けた時と同じ状態だ。命こそかかってないが、できる限りの最善を探そうと思っている。それに、やられっぱなしも好きではない。

「そういうのを見ると、そんなにひよろっこくても男なんだって思うよ」

ま、私の雑刀を止めたから見かけよりずっと遅しいのかもしれないけどね。なんて言いながら栄は札を置いた。

「あ……」

「おや、私の勝ちみたいだね」

栄の言う通り、湊の負けだった。さすがに無理か、なんて思って苦笑する。

「ほら、男ならもつと豪快に笑いなさい。仮にも私の可愛いひ孫をよろしく頼むんだから」

「それは……」

そもそも、夏希の方こそご免なのではないかと思う。自分と彼女は知り合ってまだ三ヶ月ほどで、話すようになってからは更に短い。この”アルバイト”でずいぶん話すようにはなったが、それでもやっぱり認識は友人というのが妥当だ。容姿は可愛いと思うが、可愛いや綺麗な女性は身近にいたせいかな耐性がついている。それに彼が色恋沙汰に興味があつたのなら既に恋人の一人や二人いたとしてもおかしくないのだ。そんな湊が夏希にだけ特別な感情を抱くことはひとまず考えられない。

「なら、この間だけでもいい。あの子をよろしく頼むよ」

「……………それなら」

それならいくらでも。と湊は頷いた。これが終わればまた自分は情
性な日常に戻り、学校が始まればその情性を少しは打破しようと思
定している程度。夏希との付き合いもまた前と同じになるだろう。
なんて考えていた。

「それと、侘助のことなんだけどね……………もしまた会ったら、助けて
あげてくれないかい？」

「え？」

「あんな親不孝者でも、私の家族なんだ。湊さんが侘助に優しいっ
て言った時、私は嬉しかったんだよ」

ああ、やっぱりこの人は家族が大切なんだな。と湊は改めて認識し
た。

同時に、どれほど強い人なのかも。

「僕にできることなら……………ですけど」

「ありがとう。あの機械のことも、本当、湊さんには感謝ばかりだよ」

「気にしないでください。ラブマシンはもう、僕も当事者ですから」

「それでもだよ。ふふ、湊さんが陣内に入ってくれることを願うばかりだね」

「それは……」

「あっはっは。気にしなさんな！

……よろしく頼むよ」

「……はい」

不意に、栄は湊の手を握った。皺くちやだが、しっかりとした体温と感触が湊に伝わっていく。

「大丈夫。アンタならできるよ！ 他人任せな言い方で悪いけど、頑張りなよ」

「――はいつ！」

負けないように、湊も手を握り返した。

あの頃を感じた時とは違う、けれど暖かい何かが胸に広がる。

励まされるなんて、初めてだ。そう思った湊は自然に、穏やかな笑顔で栄へ笑いかけていた。

「いい笑顔かおできるじゃないか。これなら大丈夫だよ。ありがとう、湊さん」

――なんだか、できる気がする。

やれる人間だからでも、やらなくてはいけないからでもない。やろう！ という意思が溢れてくる。

次は勝てる。きつと。

そんな気持ちを胸に、湊は栄の部屋を後にしたのだった。

――
――
――
――
――
――
――
――

「夏希も、とんでもない人を連れてきたもんだねえ」

布団に横になつて、栄は天井を見上げながら苦笑した。

あの男——有里湊はどこか浮世離れた雰囲気があつた。あの年頃の若者にある生気が感じられなく、むしろ一度死んだことがあるのではないか？　なんていう想像さえした。それほどまでに深く、虚無感のある瞳を持っていた。初対面での印象はそれだつた。けれど、いざ見てみれば、それは必死に感情を抑える為の仮面に過ぎず、侘助との会話や先ほどの自分とのやり取りでは無自覚だろうが、かなりの感情の変化を表情に出していた。何か、感情を抑えなくてはいけない事情があつたのだろうか。あの年でそれをするのは辛いことだ。栄の持論としては、あの年頃の子はまだ夏希のように明るく、元気一杯に育つべきだと思つている。そこに関しては佳主馬も同じく不安だが、とまた苦笑する。

「でも、度胸もあるし頭も回る。これからが楽しみな子さね」

あわよくば、栄の言ったことが本当になるように。

襲い来る眠気の中、暗闇に落ちる視界の中で栄はそう呟いて、笑つたのだつた。

第五話 " 意思 "; (後書き)

ちよつと重い話するんですけど、私つてばおじいちゃんやおばあちゃんにいい思い出がなくて(現在進行形で)、お年寄りつてちよつと苦手なんです。

そんな中でサマーウォーズを知つて、栄おばあちゃんを知つて、とても夏希先輩を羨ましく思いました。

正直、私が書く栄おばあちゃんは私の理想のお年寄りイメージが入っちゃつて別物になつてるかもしれせん。けど、侘助のことも、湊のことも、こう思つていて欲しいなつて理想を抱いて書きました。

手紙のシーンなんかでは、こんなおばあちゃんがいたら、月一で会いに行つただろうなあ、なんて映画ではマジ泣きしちゃつたりして……だから、もし気に入らなかつた人はごめんなさい。変になつたりしてもごめんなさい。それは私の表現不足です。

と、暗いお話はここまでにして。

伏線ですが、ちよちよこバラしながら張つていきます。まさか……つてくらいのスリルでいいと思つてるから、私の伏線は非常に簡単で、単純です。侘助の電話のお相手だつてわかつた人はいると思います。下手すれば保険の内容も。

あ、でもネタバレは禁止ですからね

湊の夏希への感情は本編で書いた通りでございます。

だつてさ、ゆかりツチや美鶴先輩なんかがいるのにうちの湊くんは全員と親友になりましたエンドを迎えてるんですから。

あくまで互いに”大切な仲間でお友達”なわけですから、いくら夏希が美少女だからつて……ねえ(何

栄と湊のやり取りはペルソナ3通しての感想も入ってます。湊って、主人公の特性上主体性があまりないから、そこを内気な性格と相まって感情を抑えようとするって感じにしました。

表情は無愛想から変化してきてるのは湊の心がだんだん軽くなってきたから。

個人的に、ペルソナ3では”やらなくてはいけない”、”やれる人間だから”って印象が強くて、やっぱり湊は受動的なイメージが強いんです。そんな人が励まされて自分の意思でやろう！　って気になればやっぱり気分も上がるかな、と。

うわ、気がつけば凄い長く書いてる。なんか長文すいません(汗

では、次回の後書きで会いましょうっ！

第六話"・気持ち"・(前書き)

気がつけばPV10000突破!!

感動感謝感激です!

これからも頑張るのでどうかよろしくお願いします。

では、始まり始まり。

第六話 " 気持ち " ;

「……」

外の騒がしさに湊はパチリと目を開けた。蝉の鳴き声に混ざって、何か声が聞こえてくる。部屋から顔を出してみれば、全員が栄の部屋に集まっていた。栄の顔には、白い布がかかっている。

「……まさか」

眩いた瞬間、目の前に夏希がやってくる。その瞳には涙を精一杯溜めており、やがて決壊してしまいそうなのがわかる。

「有里くん……」

湊の頭に疑問が大量に走る。昨日、あの時はあんなに元気になっていたのに、と。

「栄おばあちゃん……死んじゃった……」

「っ……」

「OZの混乱の影響でな、母さんの体調が悪くなったりすると携帯が自動で反応するようになってたんだが……何故か一切の反応をしなかったんだ」

「それは……」

「侘助の作ったあいつが殺したのか！」

「……いや、寿命だろうね」

メキ。と拳の骨が軋むほどに握りしめる。知らず、舌打ちをしていた。

——
——
——
——
——
——
——

「……」

誰も声を発さない……いや、発せない居間で湊は夏希の隣に座っていた。

万里子に、「あの子の傍にいてあげて」と言われたからだ。

「どうして、こんなことになっちゃったんだろう」

「……」

「……小指」

「え？」

「……小指、握ってて。このままだと涙が溢れちゃうから」

湊は何も言わず、言われた通り夏希の小指を握った。
横を見れば、夏希の両目からは涙が溢れ流れていた。

「……つく、うう……」

慕っていたのだろう、大好きだったのだろう。そんな人が死んだ事実が一気に駆け上がってきたのか、夏希は嗚咽を漏らした。次第にそれが泣き声に変わっていく。

「……」

自分はどうか。心は酷く荒れてるのに、表情は一切変わらない。去年もそうだった。戦いの中で亡くなった人がいた。同じ寮だった人も死んだ。けれど、果たして自分は泣いただろうか。

「……………」

やめよう。と思考を振り切って、湊はそっと夏希に手を重ねた。今は、この人達が落ち着くまで待とう。と心に決めて。

—
—
—
—
—
—
—
—

「葬儀の手続きに連絡に……忙しくなりそうね」

一段落したのか、全員が机に向かって座り直ったのを見て万里子の手帳に何やら書き込んでいた。

「いろいろ手配しなくちゃだし……はあ」

やはり栄の死が堪えてるのだろうか。呟くその言葉にも力がなく、無

意識にため息を吐いてしまっているようだ。

「……よう、それどころじゃねえだろう」

「万助？」

「仇討ちだ！ あのAIとか言うのをぶっ倒して侘助を取っ捕まえる！ 弔い合戦をするんじゃないのか！」

侘助という単語にピクリとする夏希。湊はそんな夏希を横目に見て、万助に視線を戻した。

「何を言ってるんだい！ そんな戦国時代じゃないんだから！ こっちは人が死んでるんだよ！」

「なんだと!？」

睨み合う二人。夏希の「もうやめて」という声は二人には届かない。……だから、湊は腹をくくった。

「篠原」

「有里くん？」

「先に謝る。ごめん」

「え？」

夏希が訝しげに湊へ顔を向けたのと同じタイミングで、湊は右手を挙げた。

「湊くん？」

「僕は、万助さんに賛成……します」

静かに言って、一度目を閉じる。再び開いた目は、もう揺れていなかった。

「アレは、あつてはいけない。これ以上混乱すれば、たくさんの人が死ぬ。それも、世界規模で」

やると決めて。やれると言われた。約束は守るものだ。

湊の中に、強い決意が芽生える。使命感から来るものではない、酷

く個人的な感情であり、単純なもの。

「止めないと、大変なことになる」

「……なに言ってるのよ」

「え？」

「なに言ってるのって言ってるのよ！

世界規模でたくさん人が死ぬ！？ ああそう！ それで？

こっちはもう人が死んでるのよ！ そんな家なのに他所様の心配なんてしてられないのよ！ わかる？ 部外者のアンタにはわからないでしょうね！ こっちは家族のことで手一杯なのよ！」

激昂する直美に全員が沈黙した。万助が何か言おうとするが、それよりも早く湊が、直美が口を開いた。

「けど……」

「けどもでももない！ アンタは自分の家族が死んでもそうできるわけ！？」

「家族なら、とうの昔に死んでます」

「は？」

「十年も前に事故に巻き込まれて死んでるので、僕にはわかりません」

直美から見ても湊の瞳に暗が落ちたのがわかったのだろう。そこで一度言葉を切る。

「……どうにしろ、こっちはもうおばあちゃんが死んでるの。世界を救う正義の味方なんかやってる時間なんて無いから」

「……」

座り、湊は小さくため息を吐いた。それから自分を見る夏希に振り返って苦笑し、ごめんと再び謝るのだった。

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

「けど、どつやってラブマシーンを潰すんですか？」

ひとまず解散となった居間の隅で、湊は佳主馬のパソコンを通じて健二や佐久間と話をしていた。隣には、佳主馬が相変わらず無愛想に眺めている。

「その方法なら単純だよ。あいつをどこかロビーに害のないエリアに封じて、そこで消せばいい。最悪、ONに連絡してそのエリアごとデリートしてもらおう。僕が囷をやって誘い込むから、二人はONに掛け合ってエリアの改造と演算をお願いできるかな」

「なるほど……けど、大丈夫なんですか？」

先輩、ラブマシーンにやられないで逃げ切れますか？」

「それは……けど、三人の中じゃ犬のAvatarである僕が一番速い。操作に関してはみんな同じくらいなら、何もできなくて、かつ足の速い僕が餌になるのが一番いいと思う。喰われたら仮Avatar作って助力を請えばいい」

「待て待て、こっちの存在も無視してくれるな」

「え？」

湊の後ろからそんな声が聞こえた。振り返った先には、万助と佳主馬の姿。更に後ろには太助と理一の姿があった。

「……やるんでしょ、あいつを」

「そつだよ。けど……」

「……キングって名前持ってるのに、負けっぱなしはカツコ悪いじゃん。だから、捕まえるなんて生ぬるいことは考えないよ。あいつ、潰す」

「うちは女系家族だから基本的に女性が強いんだけどね。僕らは湊くん賛成だよ」

「そもそも言い出しつぺは儂だからな！やるからには負けんぞ！」

「ーはいつ」

以前なら、それでも渋っていたかもしれない。いや、間違いなく渋っていた。

けれど、今は何故か受け入れることができた。それは、自分の味方が多い方がいいと判断したからなのか、それとも……

「佳主馬が戦うなら、少し作戦を変える。

……現状、佳主馬がラブマシーンに勝てる可能性は極めて低い」

「スペックの差、だよな？」

本人も理解してるのだろう。言葉に刺々しさは一切なく、湊は佳主馬に頷いた。

「あいつは画面の中に”いる”。けれど僕らは画面の外の”人間”だ。だから、並のパソコンのスペックじゃ打ち込んだモノがアバターに伝わるまでの間に、やつに動かれてしまう。

あの時の佳主馬はそうだった」

「これでも一家庭で持てるパソコンならかなり高性能な方なんだけどね。

まあ、そんなことは言ってもらえないか。ならどうする？ アレと渡り合うならかなりの速さの演算処理ができないと」

「うん、あれと同じ土俵に上がるなら。

ただ困になるのは嫌なんだよね？」

「当たり前だよ」

「なに……」

どうしよう。と湊は思考の海に沈み込む。どうすればラブマシンの速さに追いつくのかと。

「大容量のコンピュータに、それを繋げることが可能な回線……」

あの”桐条”ならこれくらい、頼めば用意してくれたかもしれない。しかし、今の携帯に連絡先は載っていないし、よしんば載っていても、死人から電話がかかって来るのだ。聞いてもらえるかどうか怪しい。

「……待てよ。理一、通信回線って借りられないか？ できる限り高性能なやつ」

「借りられなくもないけど……ああ、そういうことか。わかった、ちょっと待っててもらえるかな」

「わかった。それで、親父には電力と氷をどうにかして欲しいんだけど……」

「電力と氷？　　おお、任せろ！　　よし、ちよつくら待ってる！」

思考の海から意識を戻された湊は目の前の話に困惑を隠しきれなかった。

そんな湊に太助は小さく笑った。

「湊くん、僕の職業は会った時に言ったよね？」

「…………？」

太助さんの職業…………？　　と内心で繰り返して、脳内での記憶で該当するものを検索する。

「電気屋の店主…………？」

「そういうこと。ちよつと待ってて」

それでも困惑から抜け出せない湊が面白かったのか、太助は微笑んで、それから似合わないウインクをして陣内の門を出て行ったのだ。

———

「す」……」

「陣内家って、何者？」

「普通の家だよ」

健二と佐久間の呟きに、佳主馬はなんてことないように返す。その視線の先には、巨大な箱を囲むように置かれる大量の氷。しかも、その氷自体もとても大きく、その部屋はひんやりしていた。

「健二、100GHzのミリ波通信回線に、200TFROPSのスパコンがある家庭ってのは普通の家庭らしいぞ。ってか理一さん、実はどこ所属なんですか？」

「ちょっと、言えないト」

トラックから顔を出した理一がパソコンのディスプレイへと含みのある笑いを浮かべて、それから池の方へ視線を向けた。そこには、いくつもの電球を搭載した船が一隻。

「いやあ、凄いつスねえ湊先輩」

「……………」

「湊先輩？」

「湊さんなら思考が現状に追いつかなくてフリーズしてるよ」

「ええっ!？」

「ちょ、湊先輩!？」

健二や佐久間の呼び声にも答えず、湊はただ啞然と目の前の光景を眺めていた。

……………陣内つて、凄いなあ。なんてどこか他人事のような現実逃避を

「えいつ」

「っ!？」

びっくりした。本気でびっくりした。
湊は一步横へ飛んで、隣の佳主馬に向き直る。

「……脇腹は、良くないかな」

「僕、あんな湊先輩初めて気がする」

「俺もだよ。脇腹は苦手なんスね」

「普通は苦手な場所じゃないかな……」

どこか楽しそうな佐久間の声にやや強張った笑みで答え、意識を現実に戻された湊は周囲を見回した。隣の部屋では由美が息子の試合が始まるのか、テレビにかじりついていた。

「準備、終わったみたいだよ」

「うん」

「今度は勝手に突っ走ったりしないから、指示よろしく。リーダー」

「——うん」

二回目の返事は、一回目よりも強く。

気持ち強く持って、目の前のことだけを考える。

佳主馬を中心にパソコンの前に座り、一度目を閉じる。作戦以外の全てを思考から弾き出して、いつでも戦えるようにする。

「向こうも始まったみたいだね。頑張れ」

甲子園のことだろう。由美の息子を応援する声が聞こえた。けれど、それも思考から弾く。

「じゃあ、こっちも……」

目の前から、佳主馬の音が聞こえた。

「締まって行くっ！」

第六話 " 気持ち " ; (後書き)

遂に本編も中盤に差し掛かってきました。

ここからはオリジナル色を含みつつ原作通りの展開になりますね、ハイ。

湊クンの脇腹をつつく佳主馬クンに萌えてくれる人がいたら嬉しいなあなんて思いつつちよつと書いてました(笑

では、次回の後書きで会いましょうっ！

第七話 "再戦" ;

「ん？」

「これでもあいつより鈍いって言うなら、あいつに勝てるやつなんていないよ」

ずいぶん遠回しな言い方だが、勝つ気も勝算もあるのだろう。佳主馬の瞳には光が宿っていた。

「ラブマシーンは、来るかな」

「来るよ」

健二の呟きに、湊が答える。そこには鋭い目でディスプレイを眺める、健二の知らない先輩がいた。

「不愉快だけど、ラブマシーンにとってこれは全て、ゲームなんだから」

「っ！ 来たっ」

キングカズマの立つ場所へと真上から落下するラブマシーン。
煙に包まれ、その中から長い足を使って目の前のウサギへと蹴りを
放った。

「野郎！ 不意打ちなんて卑怯だ！」

「大丈夫。……大したことはないよ、この程度のやつ」

慌てた声の佐久間だが、佳主馬はあくまで冷静だ。

事実、あの時とまったく真逆の展開がディスプレイでは行われてい
た。

ラブマシンの蹴りを手で防ぎ、流れるようにいなす。そのまま自
分はジャンプしながら回転し、死に体になったラブマシンの顔面
へと勢いよく後ろ飛び回し蹴りを放っていた。

「決まった！？」

「まだ！」

健二の声には喜びが含まれていれが、佳主馬はそれを否定した。デ
イスプレイのカズマも構えを崩さない。

吹き飛ばすラブマシーンだが、すぐに体勢を立て直し、カズマへと突
っ込んでいく。

並のアバターだったら避けることすら叶わない速さの拳をいくつも
放つのに、それはカズマの髪の毛を揺らすことさえ許されない。

「どんなに優秀な身体でも、鍛えなければ強くなてないんだよ。出直しな」

次第にその拳一つ一つにカウンターを合わせていき、ラブマシーンは拳を突き出す度に顔面に痛打を貰っていた。

「これでっ!」

一層強いカウンターが決まり、ラブマシーンがたたらを踏む。そこへ、カズマは一気に間合いを詰め、その顔に飛び膝蹴りを放っていた。

「やった!？」

「……いや」

KOの文字は現れない。倒れたラブマシーンはゆっくり立ち上がると、一目散に宙へと飛び上がった。

「湊さん!」

「うん。――作戦、開始」

しかし、湊はそんなラブマシーンに対して薄く笑ってみせた。
確かな手応えが彼の中へと広がっていた。

—
—
—
—
—
—
—

「ラブマシーンは、勝てないとわかれば逃げ出すから、そこから作戦開始。」

改造されてるエリアまで、僕らであいつを追い詰める」

「本当に逃げ出すのかい？」

「好奇心はあっても、感情はないから。勝てないとわかったら、絶対に逃げる」

納得したのか、なるほどと頷く理一。

湊は更に言葉を続けた。

「どんな妨害をするかわからない。だから僕達はそれから佳主馬を守る。アバターならまた作り直せばいいから、最悪喰われたっていい」

普通、戦いとは負ければ死だ。しかし、これは命を失うことはない。それよりも、ラブマシーンを生かしておくことの方が危険だ。栄のような被害者を増やしてしまう可能性がある。

「だから、何としても佳主馬を守って、ラブマシーンを追い込む」

湊の言葉に、全員が頷いた。

——
——
——
——
——

「くっ、くっ……」

「ラブマシーンに操られてるアバターだ。行くぞ健二！」

「う、うん」

カズマに取り付く二体のアバターがはたき落とされる。見れば、リスと猿がハリセンを片手に宙へと浮いていた。

「佐久間、小磯、それは？」

「合法チートってやつですよ。OZからの借り物です」

もちろん、この期間だけだろう。けれど、健二も佐久間も二人からは考えられない動きでラブマシンに操られたアバターを叩いていく。

湊はその様子に小さく笑った。

「湊さん！」

慌ててディスプレイへ意識を戻す。そこにはビルに挟まれたカズマと、その目の前でニヤリと笑うラブマシン。

「させない」

湊が駆け出すよりも速く、刀をもった忍者のようなアバターがラブマシンに斬りかかる。

誰かは、隣から聞こえる声でわかった。万助だ。

「師匠！」

「弟子に任せっきりになぞできるか！」

湊、佳主馬を任せた！」

「はい」

ミナトがビルの際間からカズマを引っ張り出して、そのままカズマの手を掴んでラブマシーンへ放り投げた。

「だあっ!?!」

投げられた勢いそのままにラブマシーンへ飛び蹴りを放つ。体勢を崩したラブマシーンへ、カズマは一息で間合いを詰めていた。その背後ではリイチとミナトがエリアの門を開いている。

「これは……栄おばあちゃんの、仇、だあああっ!」

速さと重さを兼ね備えた拳をいくつも放ちラブマシーンを後ろに後退させる。

そして、最後に跳躍しつつ、クルクルと回った。

「これで、終わりだあっ!」

ガン。とラブマシーンの腹に蹴りが入り、門の向こうへ放り込まれる。

そして門が閉まり、それは和風な城を思わせるカタチへと変わっていく。

「順彦！ 邦彦！ 克彦！」

「おうっ！」

「久々に大技行くぜ！」

「あいよー！」

三つのアバターが消防車から現れ、城の壁の一角にホースを繋いだ。そして、中へと放水していく。

「父ちゃん達、かつこいー！」

「いー！」

いつの間にもやら集まった子供達が湊の横でそんなことを言っていた。不意に、眺めていたサクマが声をあげる。

「うし、これでラブマシーン封印だ！」

あとはOZがこのエリアごとデリートしておしまいな」

その言葉に、湊はため息を吐いて佳主馬の頭に手を置いた。

「な、なんだよ」

「……お疲れ様」

撫で撫で、撫で撫でと頭を撫でて、湊はもう一回ため息を吐く。

「そついつことされて喜ぶ年齢じゃないんだけど」

言いながらも手をどこかそうとはしない佳主馬に苦笑して、湊は頭を撫で続けていた。

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

その様子を、夏希は眺めていた。表情が少なかったクラスメイトは、同じ人とは想像できないほど豊かな表情でラブマシーンを追い詰め、そして今は笑顔で佳主馬の頭を撫でていた。

「有里くん……」

学校では、彼から話しかけて来ることはほとんどなかった。新幹線で聞いた通り、湊は話し下手で聞き上手だからだろう。会話は成立しても、話しかけるのは自分の方が多い。けれど、さっき彼は自分の気持ちを夏希達の目の前で答えた。直美に辛く言い返されても、折れることなく意思を貫きやり遂げた。

「後は、侘助の野郎か」

「っ！」

万助の言葉で身体の体温が一気に下がったのではないかと錯覚するほど、夏希は現実を意識を戻された。

手に持つソレを、強く握りしめる。

――侘助の携帯電話を。

これを使えば侘助と連絡が取れる。しかしその為にはロックを解除しなくてはいけない。四桁の数字が彼女を邪魔していた。

侘助の誕生日、生年月日ではなかった。他に考えているのは、一つだけ。しかし、それができなかった。怖かったのだ。

それで解除できなかつたら、侘助が自分達を……家族と見ていないように思えて。

不遇な子供時代を考えれば当たり前かもしれない。けれど、栄に言った言葉……恩返しは夏希の頭から離れない。そのせいで夏希はその番号を押すことができなかった。

「お前のせいじゃー!!」

「え？」

その時、佳主馬の怒声が夏希の耳に入ったのだった。

—
—
—
—
—
—
—

「……ん？」

佐久間のパソコンに浮かび出される、いくつもの警告。
それが何か、最初はわからなかった。

「なんだ、これ」

「ラブマシンは捕まえたってのに……」

英語で何かが表示されている。何なのだろうとそれを徐々に訳していくと、佐久間は自分の顔から血の気が引くのがわかった。

「け、健二……」

「なに？」

「あっちの人達に、スパコンの部屋を見てくれって言ってくれ。早く！」

これが本当なら、最悪だ。と佐久間は急いでOZへと連絡を出したのだった。

— — — — —

「先輩！　急いでスパコンの部屋を見てください！」

異変は、湊達のパソコンのディスプレイにもあった。城が、何か歪んでいるのだ。

そこに入る健二の声。湊は後ろの部屋の襖を開いた。

「っ……………」

「なっ、熱暴走！？　氷はもう溶けたっていうのか！？」

サウナさながらの温度になったそこには、氷を置いてあったタライが消えていた。

「氷なら、翔太兄が持ってたよー」

「今日は暑いから、おばあちゃんが涼しくなるようにって」

「先輩！」

健二の声に反射的に振り返る。そこには、湊の理解できない画面が広がっていた。

「佳主馬！」

黒い、まるで悪魔のような姿のソレがカズマを壁へと叩きつけた。

「……湊先輩、最悪なお知らせです」

「……なに、かな」

「ラブマシンの奪ったアバターは、OZや世界の重役も含めて、四億」

「四億!？」

「……」

呆然するしかなかった。四億なんて単語、普段耳にすることはない。そもそも、それは世界人口の十割以上をラブマシンの奪われていることになる。

立ち尽くす湊を、何かが横へとずらした。金髪頭が、彼の前を横切る。

「ったく、ばあちゃんが死んでみんなが忙しいって時にゲームかよ。部外者とお子様は楽でいいよな」

「っ……」

湊は、佳主馬の表情が怒りに染まるのを見た。見て、しまった。

「……の……だ、お前の……」

「あ？」

「お前のせいであつて……！」

バキツという音と共に、佳主馬の怒声が響き渡っていた。

「あだつ……な、なんだよ！」

「うるさい！　お前のせいであつて……！」

再び拳を振り上げる佳主馬を湊は慌てて抑えた。いくら少林寺と太極拳を学んでいると言っても、体格差には勝てず。ましてや湊は見かけからは考えられない身体能力を有している。どんなに力を込めていても佳主馬の拳は動かなかった。

「離せ！　離せよ！」

「なんだよ……なんだってんだよ！」

「湊先輩！」

睨み合う佳主馬と翔太だが、状況はそんなことも許さない。
由美の見ていた中継はニュースに変わり、OZのワールドクロック
は、狂ったように時間を動かしていた。

【速報です。先日宇宙へ打ち上げが成功した人工衛星”あらわし”
が、地球へ向けて落下している模様です】

「え？」

狂った時計と共に、ディスプレイには写真が浮かび上がる。
数字が三時で止まった瞬間、それは始まった。

「この数字の動きは……まさか、カウントダウン？」

「けど、何の……」

「……待て、この写真は全て原発だ」

理一の言葉に、湊がハツとする。このタイミングでのあらわしの落
下、ワールドクロックによるカウントダウン、そして、原発の写真。

「あらわしが……これのどこかに落下するかもしれない」

理一も同じ結論に至ったのだろう。やや青ざめた顔で頷いた。

「な、なんだよそれ！ そんなことが起きたら、たくさんの人が死ぬんだよ！？」

「……………佳主馬、それ……………どういふこと？」

「え？」

湊の少し後ろに、佳主馬の母——聖美が立っていた。並ぶように、夏希と万里子以外全員が居間を覗いている。

「パソコンの中の話、よね？」

「っ……………」

「佳主馬！？」

佳主馬はパソコンを操作して、カズマをラブマシーンへと向けた。巨大なソレは、一度後光を光らせると指を一本カズマへ向けるだけ。

それだけで、その身体を作る四億のアバターの一部がカズマを蹂躪し、一瞬で行動不能にまで追い込んだ。そして、動かなくなったカズマを、口の中に放り込んだ。

「つく……つく……」

畳でできた床を殴り、嗚咽を漏らし始める佳主馬。戦える者は、これで居なくなった。

—
—
—
—
—
—
—

「……佐久間。あらわしの解除方法は？」

「え？ えっと……ラブマシンに喰われたアバターの中に管理者がいるから、そのアバターを取り返せば。けど、四億から探すのは……」

「なら、アバターを全部取り返せばいい」

平坦な声で、湊は言葉を紡いだ。その顔にもう驚きはなく、瞳の光は消えていない。

湊は、まだ折れていなかった。

「……無理だよ」

「無理じゃない」

「無理だよっ！！」

キツと湊を睨み付けて、佳主馬は怒鳴っていた。

「俺はもう戦えない。相手は四億！ どうやって勝つんだよ！」

「それは、これから考える」

そう言って、湊は笑った。口元を僅かに吊り上げただけの笑みだが、とても力強い笑顔で。

「まだ負けてない。あらわしだって落ちてない。僕らは、動ける」

かつて、全ての死が確定した。けれど、湊は仲間とそれを打ち砕いた。

ならば、今回だってできない道理はない。

「僕は、生きてる。なら、まだ負けない。頭が働くなら、考えることをやめない。指一本でも動くなら、動くことをやめない」

「けど……」

「諦めないよ。覚悟、決めてるから。生きてるなら、僕は絶対に負けない」

かつて、自分は死んだ。けれど今こうして生きている。ならば、それは負けではない。滅びの直前まで行っても、自分達は勝ったのだ。

「数字がゼロになるまで、それこそ。一秒以下になっただって諦めないよ」

「――だから、頑張ろう？」

湊は、そう微笑んだのだった。

――
――
――
――
――
――
――
――
――
――

「……有里くん」

少し離れたところで成り行きを見ていた夏希は、湊の姿に驚きを隠せなかった。

こちらに来てから驚いてばかりだったが、今回一番の驚きだった。普段、自主的に何かをするでもなく、困ったら「どうでもいい」何かをして感謝されても「気にしないで」と言うあの湊が、諦めない。と。負けないと笑っていた。自分の身内のような豪快な笑顔ではない、彼らしい、口元を吊り上げる笑い方。それが、いやに眩しかった。かつこいいとすら思えてくる。

「あれ？　これ、母さんの手紙？」

「え？」

そんなみんなを他所に整理を行っていた万里子がポツリと溢した。そこには、「みんなへ」と筆で書かれた封筒。夏希は、思わずそれを手に取って居間へ走っていた。

「……夏希！？」

何も考えてない。けれど、栄がみんなへ宛てた手紙ならば、きっと

とても大切なことが書いてあるはずだ。だから、お願い。

そう願いを込めて、夏希は居間へと飛び込んだのだった。

第七話 "再戦"; (後書き)

あれ？うちの湊くんはヘタレなはずなんだけど……あれ？

湊くんに自主性を持たせようと頑張った結果がこれです。

中盤どころか、もう終盤に差し掛かってますね。

ああ、もっと夏希を書きたいのに出番が来ない……

いいもん、次回作のプロットも考えてあるんだから！

では、次回の後書きで会いましょうっ！

第八話 "おばあちゃん" (前書き)

夏休みだからできるこの投稿の早さ。

このまま最終話まで突っ走りたいです！

では、始まり始まり。

第八話 " おばあちゃん " ;

「みんな。これを見て」

突然入ってきた夏希に目を瞬かせる湊。けれどそんなことはお構い無しに夏希は封筒を開いて手紙を取り出した。書き出しを見て、やっぱり……と夏希は泣きそうになるのを堪えた。まだ、まだ泣くには早い。

「おばあちゃんが私達に遺してたの」

「夏希。貸してもらっても、いい？」

「うん」

追いかけてきた万里子に渡して、夏希は湊の隣へと移動した。

いまいち理解できていない湊にえへ。と笑いかけて、万里子の言葉に耳を傾けた。

内容は、やはり遺言だった。とても栄らしいサバサバしたモノで、だから余計に切なくて、読んでいくうちに万里子が、つられて万助が、万作が……と泣いていないのは湊くらいで、夏希も堪えきれず、涙を流していた。

「最後に。」

「――家族とは一緒に飯を食うこと。それから、
――いちばんいけないのはおなががすいていることと、独りでいる
ことだから」

その言葉で、手紙は締められていた。その言葉を聞いて、湊と夏希は同時に正反対の方向へ動き出した。湊は台所へ、夏希は庭へと。

「夏希!?!」

「湊くん!?!」

万里子の声に、湊は一度立ち止まった。振り返らず、

「……お腹が空くのは、一番いけないことです。誰も、朝から何も食べていないから」

湊の言おうとしていることがわかったのだろう。万里子はクスリと笑うと、涙を指で拭いた。

「そつね。じゃあ、手伝ってもらえる?」

「はい」

穏やかな声で返事がきて、また万里子は笑ってしまった。

「……ホント、母さんが認めただけはあるわね。嘘が誠になればいいのよ」

そう呟いて、万里子は台所へと向かって歩き始めたのだった。

— — — — —

「……よっっ」

気合いも元気も貰った。と夏希は一回両手で頬をパンと叩いた。携帯に、暗証番号を入力していく。それは栄の誕生日だ。

「お願い、開いて……」

果たしてその願いは、叶った。また泣きそうになるが、頑張って我慢して、夏希は佯助へと電話をかけたのだった。

— — — — —

「……くそ」

ホテルにいても気が晴れずに車を出したものの、渋滞に巻き込まれ悪態をつく侘助。

反対車線は車がなく、Uターンしてしまおうか悩むほどだ。

渋滞の原因が自分にあることが、彼を苛つかせる最大の理由なのだが。

「あ？　電話？」

パソコンを開くと、そこには見覚えのある顔のアバターがいた。何故？　とも思っがひとまず出ることにする。

「夏希か、どうした？」

「帰ってきて、侘助おじさん！」

「……よく電話番号がわかったな」

夏希の言葉を見殺しして、侘助は薄く笑みを浮かべた。自分にもわかるくらい、ぎこちない笑いだった。

「わかるよ。だって、侘助おじさんの携帯の暗証番号……おばあちゃんの誕生日じゃない。それを見てかけてるんだから」

「……」

「お願い、帰って来て」

「ババアの命令か？」

「ちがうのっ！」

その言葉は、泣き声だった。自分に対して泣いてるようには感じられない。ならば、何に？

侘助の思考は、次で完全に停止することとなる。

「栄おばあちゃん……死んじゃったの」

「っ!?!?」

「お願い……帰って来て……」

頭が真っ白になる、とはこのことだろう。侘助は呆然と、窓から外を覗いた。こんな状況でも、夏祭りはやっているようで……

「……ばあちゃん」

——そこに、幼い自分と若い頃の栄を見たような気がして、

「っ……ばあちゃんっ!!」

一目散に、無我夢中にUターンをして、侘助は反対車線を走り出していた。

——
——
——
——
——
——
——

車の走る音が響き、全員が縁側に集まる。湊はテーブルに料理を並べながら、その様子を伺っていた。

「あれは……侘助か？」

万助の呟きは、車が岩にぶつかる音に掻き消された。既にあちこちがへこみ、高級感があったであろうそれは廃車寸前もいいところだった。

「ばあちゃん……ばあちゃんっ！」

ボロボロの車から一心不乱に出て、侘助は縁側まで走り、万里子を見上げた。

「……とりあえず、挨拶しておいで。そうしたら、みんなでご飯にしましょ」

ね？ と、侘助に笑いかけ、今度こそ、侘助の瞳から涙が零れ落ちたのだった。

「……良かったね、篠原」

「え？ あ、有里くん？」

「お疲れ様」

何をしたのかは知らないが、夏希が何かしたのだろう。そう湊は直感していた。だから、嬉しそうに眺める夏希へ、湊は笑いかけてやる。こういう時こそ笑顔。それは、一年前の戦いで学んだことだ。途端、夏希の頬が少し赤くなる。

「ありがとう。けど、まだ終わってないよね」

「うん。でも大丈夫だよ、きっと」

栄の部屋へ歩いていく侘助に視線を向けた湊に頷いて、夏希は笑顔になった。

少し涙を流しながらの笑顔だったが、とても綺麗なものだった。

——
——
——
——
——
——

「……ばあちゃん」

横たわる栄に、侘助は笑いかけた。いつもの不敵な笑みではなく、とても落ち着いた笑顔で。

「まずは、じいめん」

土下座するカタチで、侘助は頭を下げた。言葉が返って来ないのはわかってる。それでも、侘助は続けた。

「あと、ただいま」

次は、言わなければいけなかった言葉。昔から栄は、この手の挨拶にうるさかった。

陣内家にとつてとても大事な言葉なのに、侘助はそれを言わなかった。今更ながらの後悔が侘助を襲うが、それを抑えて、また笑顔を作る。

「腹減ったから、メシ食ってくるよ。そしたら、ラブマシーンを止める。ケジメ、つけて来るよ」

言いたいことを言えたからか、立ち上がって部屋を出ようとする侘助。

「一言っておいで、バカ息子。」

「っ……行ってきます、ばあちゃん」

そんな言葉が聞こえた気がして、侘助は今度こそ居間へと足を運んだのだった。

「……空いてますよ」

「おう。えっと……」

「有里湊です」

「ああ、そうだったな」

婿殿婿殿なんて呼んでいたせいか、名前をすっかり忘れていた。そんな侘助の様子に湊は笑って、お茶碗を渡していた。

「——やっぱり、優しい人でしたね」

「……はっ、そういうお前さんは強すぎだよ。その年でどんだけ修羅場くぐってるんだか」

こうしてここに自分がいる一因に、目の前の少年が絡んでいることは、なんとなく理解できた。自分を優しいと言う少年は侘助の言葉に答えず、ただ笑っただけだった。

「それで、どうするの？ 時間が迫ってるのは確かなんだけど」

「とりあえず、効率良くラブマシーンからアバターを奪う方法を考える。」

あんな化物相手に戦闘って選択肢は無理だから、それとは別のカタチで。その間に侘助さんは小磯や佐久間と協力してラブマシーンをどうにかする」

「ま、あいつに直接介入できるのは開発者である俺だけだからな。あわよくば解除までしてやるよ」

侘助の言葉に湊は頷いて、コップの水を一気に飲み干した。

「あとは、アバターを奪う方法。ゲーム感覚のラブマシーンを誘い出して、戦う以外の方法で……」

「それだけ聞いてると侘助のAIって賭事が好きそうよねえ。侘助は賭事なんてやらないと思ったんだけど」

「好奇心が強いからな、自然と全て遊び感覚になっちまうんだよ」

思考の海に沈みかけた湊に、彼が作った厚焼き卵を食べる直美の声がかかった。
ハツとして彼女を見れば、自分の言ったことで侘助をからかっている。

「そうか、その手があった。佐久間」

「はいはい。なんででしょうか先輩」

「OZに頼んで、カジノエリアのルールを変えて欲しいんだ」

「ほえ？　なんでまた？」

「簡単にあいつからアバターを奪える方法があったんだ」

「！　なるほどな。カジノでアバターを賭けてゲームをするわけか」

「なるほど！　しかし、よくそんなこと思いつきますね湊先輩も」

「これでも必死なんだよ、僕だって」

「シシシ、それを表情に出さない辺り、本気でただ者には思えないな」

「……僕はただの篠原のクラスメイトですよ。佐久間、頼める？」

「お任せください。健二！　そんなわけでちょっと外せないから昼飯頼んでいいか？
後で払うから」

「わかった！」

湊はあの二人にもたくさん迷惑をかけてるな。なんて思って、少し申し訳ない気持ちになってくる。
後で良いところのご飯でも奢ろう。なんて考えて、湊は再びテープルにいる全員に意識を戻した。

「で、何で戦うの？」

「……」

「……」「いいいいか、うちらしくていいじゃねえか」

「じゃあ、夏希の定番ね」

「え？」

「ああ、そつだな」

「頑張れ、夏希」

「え？ え？」

なんで？ どうして？ と湊の向かい側であたふたする夏希に、
侘助はシシシ。と笑った。

「当たり前だろう。何人が夏希にお小遣い奪われてると思ってるんだ？」

「う……」

「まあ、俺とばあちゃんには勝てなかったけどな」

「な、なら侘助おじさんがやってよ!」

「ばか、俺はラブマシンの解体作業もするんだぞ？
どっちも片手間でなんてやってられるか」

「夏希姉、頑張れ」

「佳主馬まで……」

「篠原」

「……なに、有里くん」

「よろしくお願いします」

ペコリと湊は頭を下げた。精一杯と言うわけではなかったが、湊の
気持ちは夏希に伝わってきた。伝わって、しまった。

「……わかった。みんなの-avatar、私に貸して!」

夏希も陣内家の一員なのだ。覚悟を決めてしまえば、躊躇う気持ち
はあっさりと消えてなくなっていたのだった。

第八話 "おばあちゃん" ; (後書き)

どっちかって言うとおばあちゃんより侘助おじさんな回の気がしないではないですけど、細かいことは気にしない！

侘助おじさんみたいな不器用な人って大好きです。佳主馬くんみたいなベクトルの不器用な人も大好きです。と言っか、陣内家の皆さん大好きです！

さて、今回はこいこいタイム。もうホントにラストスパート入ります。

初めて書いた小説がこのペルソナ3を知らないとまず理解ができないっていう非常に狭い門の小説ですが、読んでくれる人がいてくれてとても嬉しいです。

もっともっと頑張りますので、生温く見守ってください！

では、次回の後書きで会いましょうっ！

第九話"・ミンナノチカラ"・(前書き)

実はこいこいのルールが曖昧だから表現も曖昧だったりします。
いいの！ 大事なのはみんなの気持ち！

そんなわけで、始まり始まり。

第九話 " ミンナノチカラ " ;

「作戦は残りが一時間半になったら。五分前に集合しよう」

侘助と話し合った結果、湊はそう言ってひとまず解散となった。侘助は太助とパソコンの準備に。それには健二や佐久間も加わって話し合いをしながら進めていた。

「健二も大役だな、頑張れよ」

「佐久間だって」

「すまないな、これは陣内のことだって言うのに巻き込んでしまっ
て」

「いえ、ラブマシンは僕のアバターですし……それに、先輩には
お世話になってますから」

「だな。ま、後でメシでも奢ってもらえればいいですよ」

「仲が良いんだね、キミ達は」

「付き合い自体は今年からだから短いんですけどね」

「湊先輩、優しいですから」

「それは、なんとなくわかるな」

なんとも不思議なやつだと、侘助は湊をそう評価していた。対面したのは二回で、話したのは僅かではあるが、少なくとも悪いやつではないことは明らかだった。それ以外は掴み所がいまいちわからないと思っている。ただ者じゃないとも。

「ま、今はとりあえず目先のことに集中するか」

ちやんと話をするにしても、これを片付けないことには始まらない。意識を目の前のパソコンに切り替えて、侘助は深呼吸をしたのだった。

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

「有里くん、ここにいたんだね」

「…………？」

湊は自分が借りている部屋で、イヤホンを付けて座っていた。

夏希はそんな彼に近づいて隣に座る。音楽プレイヤーには”Bur
n My Dread”と映っていた。

「集中してるの？」

「ううん。やることがないから」

イヤホンを外して、一時停止をかける湊。顔の向きは変えず、湊は部屋から庭を眺めていた。

「ありがとね、有里くん。いろいろと助けられちゃった」

「気にしないで」

「だから、気にするよ。こんなにしてもらって気にしないなんて、無理だよ」

「そっつ？」

「うん」

会話が途切れて、湊は小さくあくびをしながら伸びをした。その姿からは一切緊張が見られない。あまりにもいつも通りの湊に夏希は声に出して笑ってしまった。

「…………？」

「あ、ごめんごめん。有里くん、緊張してなげだから」

「ここまで来ちゃったからね。あとは、やるしかないよ」

「やるのは私だけだね」

「…………それは、ごめん」

「冗談よ。これはもう陣内家の問題なんだから」

「…………緊張してる？」

「正直言つと、ね。怖くないかって聞かれたら怖いもん」

「そっか……うん、そうだね」

本来、それが普通なのだ。そういう点において、自分は”異常”であると思っっている。
メンバーの中でも、一番”恐怖”にかかりにくかったし、と内心で苦笑した。

「ね、有里くん」

「なに？」

「私のこと、夏希って呼んで」

「……え？」

「だから、夏希って呼んでよ。私のこと」

「えっと、どっしって？」

「そこまで深い意味はないけど……その、有里くんには名前で呼んで欲しいなって思ってた。恩人だし」

頬を朱色に染めて、湊に笑いかける夏希。なんとなく、夏希が男女問わず人気があることにわかった気がした。と湊はそれに頷きながら思考する。

彼の周りにもこの手のタイプの人がいなかったせいか、不思議な感覚が彼に広がっていた。

「その代わりに、私も湊くんって呼んでもいい？」

「いいよ」

よっぽど変なあだ名でもない限り、名前の呼ばれ方には文句はない。普通、同年代の女の子に名前で呼ばれるようになると言っるのはそれなりに意識してしまってもおかしくないことなのだが、湊はそこらに鈍感なのでわからないのである。

「じゃあ、湊くん」

「なに？」

「音楽、聴かせて？」

それくらいなら。と湊は音楽プレイヤー一式を夏希に渡した。すると夏希はイヤホンを片耳にだけ付けてもう片方を湊に渡した。意味がわからず、湊は首を斜めに傾げた。

「湊くんも聴いてたでしょ？ だから半分ずつ」

「……なるほど」

理解したのか、渡されたイヤホンを耳に付ける湊。本来ならば学校一人気の夏希からイヤホンを半分ずつ。なんてされたら喜びのあまり有頂天になってしまいそうなものだが、そんなことでいちいち有頂天になっていたら湊はやはり一年前大変な目に遭っていたのは間違いない。

つまり、やはり彼はそういうことに疎く、鈍感なわけである。

「――」

先ほどまで聴いていた曲がまた最初から流れ出す。

その間、二人は無言でただ曲を聴き入っていたのだった。

「なんだろう、今聴いたらちょっと元気になった」

「そっか。確かに、あの曲はそういつのがあるかも」

「え、どうして？」

「Burn My Dreadって、訳すと”恐怖を焼き尽くせ”って意味になるんだよ」

「そう、なんだ」

「うん」

不思議と、夏希の中の恐怖はかなり薄らいでいた。

それが曲の効果なのかはわからないが、湊の言葉に思わず笑ってしまっ

「なら、私の怖いって気持ちを焼き尽くしてくれたのかな」

「かもね。と、時間だ」

時計は確かに約束の時間を指しており、湊は立ち上がった。夏希も音楽プレイヤーを置いて湊の後ろに続く。

「湊くん」

「……？」

不意に、隣に並んだ夏希が湊に向かって、

「頑張ろうね」

「……うん」

そう言って、片目を閉じたのだった。

——
——
——
——
——
——
——
——

「……来た」

ミナト、サクマ、ケンジの目の前に巨大な身体のソレは現れた。
やはり、ラブマシーンも三人を敵と認識しているのか優先的に狙っ
てくるようだ。

「今度は後がないから、今度こそ終わりにしよう。じゃあ、作戦開
始」

フロアの雰囲気急変する。何も無い白いフロアだったそこは、カ
ジノのような場所へと変化していた。

「ラブマシーン、アカウントが欲しいんでしょ！」

ナツキが、陣内家全員のアバターがミナト達の周りに現れる。
ナツキは人差し指をラブマシーンに向けてキツと睨み付けた。

「欲しいならあげる。けど、私達に勝つてからよ!!」

【勝負を挑まれました、受けますか？】

アナウンスが入って、カーソルがイエスに合わせられる。
それはラブマシーンが勝負に乗ってきたことを意味しており、最後
の戦いの合図でもあった。

「夏希、落ち着いて」

「大丈夫」

花札が並べられ、最後の勝負——こいこいが始まった。

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

「……おや、ラブマシーンが停滞した？」

ふむ、どこかでまた何かやられているのかな？

まあいいか」

男は携帯の画面を見て、動きを停止させたラブマシーンに首を傾げるも、気にしていないのか携帯をポケットにしまい、再び目的地へと歩き始めた。

「後始末はしなくてはいけないからね。今回はより慎重に。ね」

薄気味悪い笑みを浮かべ、ゆっくり、ゆっくりと歩きを進める男。昼間にも関わらずその男の周囲だけは、どこか暗かった。

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

「……」

「いいわよ夏希！　このままベットの上げて一気に奪っちゃいなさい」

「ただし油断するな。そいつは成長するようプログラムを組んであるからな」

「……なんでそんなもん作ったのよ」

「研究成果と、その暴走だよ」

ジト目で自分を睨む直美に苦笑して、侘助は自分の作業を進めていく。

その中で彼は共同作業をする健二と佐久間の能力に、侘助は驚いていた。

佐久間の持つパソコン能力も、健二の持つ計算能力も、年頃の男子とは思えないほどに頼もしく強力なものだからだ。

無論、侘助の方がパソコンには詳しい。だが佐久間は侘助とは違う観点から物事を見て、健二は必要な演算を全て瞬殺してしまう。

——将来有望だな、こりゃ。

一人、ニヤリと笑って侘助はまたパソコンの中に没頭していた。

——
——
——
——
——
——
——
——
——
——

「……」

——雲行きが怪しい。

ゲーム展開を見ながら、湊は表情を引き締めた。致命的な負けには至ってないが、徐々に負けも増えてきた。

つまりは、侘助の言う通りラブマシンが”成長”しているのだ。

「あっ……」

誰かの出した声に、湊はディスプレイに意識を戻した。

そこにあるのは、点滅する74の数字。そして、

【ベットが足りません。ゲームを終了しますか？】

最悪のアナウンスだった。あれほどまでに気合いが入っていた夏希も、折れそうになっている。

「……ちょっと待ってて」

「びびる気？」

「OZに行つて、誰かしら連れてくる。まだ生きてるアバターはあ
るから」

「このままだと、まずい。」

残り時間も一時間とちょっとしかない。このまま行けば、負ける。
湊は自分のアバターをカジノの外へ出そうとして、その足を止めた。
そこに、小さなアバターがいたのだ。誰も見たこともないアバター
が。

【ナツキへ】

メールだった。翻訳されていると言うことは海外の人間だろう。
そのアバターは、続けて吹き出しに文を出した。

【ボク達のアカウント、使ってください】

同時に、ミナトの目の前にたくさんのアバターが現れる。

数えようとして、その多さに嫌になってやめた。振り返れば、ベクト数が三千万も追加されている。

【ボク達の世界を、守ってください】

一人一人の吹き出しが集まり、巨大な吹き出しを作りあげる。ここに来た人達は、ナツキに助けをもらう為に、ナツキを助けに来たのだ。

【ボク達の家族を、守ってください！】

「……凄い」

意識せずに、その言葉が出た。これを凄いと言わずに、何と言っ？

湊は、確かに仲間と世界を救った。命を以て救ったのだ。けれど、それは他の人が知ってることでもなく、むしろ滅び直前にはストレガのタカヤが率いるニユクス教が広がり、心を締め付けられることの方が多かった。

仲間はいたが、自分達は孤独であった。

しかし、夏希はどうだ？ 夏希はこうして世界規模の危機に直面して、世界中の人と一致団結して、その力を借りてその人達を守ろうとしている。その光景は湊にとって非常に眩しいモノであり、その中心にいる夏希に、ひどく惹かれた。

「っ……」

感極まってしまったのだろう。夏希は涙が流れる目を両手で押さえた。

だから、ナツキに起きた変化に気づくのに少し遅れてしまった。

「え……?」

クジラのような生き物から発せられた光がナツキの姿を変えていく。白い天女のような服を纏い、背中から羽を生やしたその姿は、まるで女神のようだった。

「すげえ、吉祥のお守りなんて初めて見たよ俺」

佐久間の声が居間に響く。天もナツキに味方しているようだった。

「……げ、ベット数がやばい」

「夏希姉。あいつ、決める気だよ」

翔太と佳主馬の声に、夏希は頷いた。その瞳に迷いは一切ない。

栄に良く似た、強い光を持つ瞳だった。

「けど、これに勝てば私達の勝ちよ」

「……だね」

それに気づいたのだろう。佳主馬はそれだけ言って画面を見つめた。
――泣いても笑っても、これで最後。

「いざっ!」

『勝負!』

それは、きつと世界中から聞こえた声。

――絶対に勝てる!

始まる前から確信が持てた。負けない。負けるわけがないと。
引く札は当たり札ばかり。吉祥のお守りの力なのか、奇跡なのか、
それともここにいる全ての人の、みんなの力なのか。

「きた……」

「きたきた！」

『きたあっ！！』

不安は、一切なかった。チラリと後ろを見れば、湊が自分を真っ直ぐ見つめていた。

目が合うと、にっこりと、目を細めて笑いかけられる。初めて見た笑顔に少し心拍数が上がるが今は我慢。

「やっちやえ」

「うん」

彼の、少し高い声が夏希の耳に届いた。

だから、夏希は頷いて返す。そして、目の前の敵に、トドメを刺したのだった。

第九話 " ミンナノチカラ " ; (後書き)

みんなで力を合わせる。ってなんかいいですよね。

その点において、ペルソナ3とサマーウォーズはほぼ真逆だなあと
思います。

ペルソナ3の力を合わせるはあくまで寮のメンバーが主です。黒沢
さんとかいたけどやっぱりメインはあそこの人です。

影時間が一般人が入れない場所だから余計になんですけどね。けど
ラストバトルも結局は湊クン一人で、コミュの人や仲間の声がチロ
ツと入っただけです。確かに、それはきつと力になると思いますけ
ど、湊クンの最期は一人だったんです。封印という孤独を選ぶしか
なかったから。それは栄おばあちゃんが一番いけないことに書いて
あることだって気づいたのは、ホントついさっきだったんですけ
どね。

逆に、サマーウォーズはどこまでも暖かい話です。侘助も一人じゃ
ない。ナツキだって世界中からの応援を受けてる。原作での本来の
主人公、健二だってそうです。

陣内家のみんなから頑張れって。だからこそ、あれほどまでに暖か
いんです。

そんな陣内家に……夏希先輩に湊クンが惹かれてもおかしくないと
思います。

恋愛感情かはさておき(マテ

さて、次回は最終話です。アホなペースで書き続けてるけどたぶん
寝る前にエピソードまで書いて、下手すれば日が昇った頃に新作あ
げてそうです。

最終話はちよつと超展開しちゃおうと考えてるので、萎えたりした
らごめんなさい。

けど、湊がいる理由を出せるのはここなんです。
美味しいところはここなんです！　だから、生温く見守っててくれ
ると嬉しいです。

ではでは、次回の後書きで会いましょう！

第十話"ラストバトル";(前書き)

最終話……にならなかった。

めっちゃ長くなっちゃって最終話にならなかった！

けど、一番最後のホントに最後。これが終わればもうスタッフフロ
ルです。

そんなわけで、始まり始まり。

第十話"ラストバトル";

「うっし！ どうだ健二！」

「上手くいったよ！ 原発の制御が取り戻されて続々と回避されてる」

「よっしゃあ。しっかし、先輩達はすげえなあ」

「だよね。湊先輩ってやっぱり強かったと言うか」

「だな」

笑い合つて、健二と佐久間は炭酸飲料の缶をカツンと合わせる。勝利の祝杯、といったところだろうか。

「くー！ 仕事の後のこれは美味しいなあ」

「佐久間、なんかおじさんみたいだよ」

あはは。と笑う健二。疲れたけれど、その分の達成感も多かった。

今まで感じたことのない充足感を健二は感じていた。

「……二人とも、盛り上がってるところ悪いが最後の仕事だ」

「あ、侘助さん」

「わかってますよ。ラブマシーンを解体しないと」

「ああ。……迅速にな」

「え？」

ディスプレイ越しの侘助のの声は焦っているようだった。健二はどうしたのかとディスプレイを眺めて、缶を落としそうになった。

「カウントダウンが止まってない!？」

「ああ。あらわしの落下制御はまだ解除できてねえ。それはラブマシーンが握ってるからな……」

「そんな……場所は？」

「……うちだ」

二人は、慌てて缶をテーブルに置いたのだった。

—
—
—
—
—
—
—

「ラブマシーン捕捉。後はあらわしの制御を解除してぶったたくだけだ。理一、軸はずらせたのか!？」

「一応はね。あらわしの制御が戻ればすぐにもそつしてくれるぞうだよ」

残り時間は一時間を切っている。一步間違えれば大惨事の中、陣内家の面々は全員中にいた。

「佳主馬、動けるか」

「うん」

「なら良かった。母親と妹は守ってやらないとな？」

侘助のニヤニヤ笑いを無視して、けれど頷く。あとはあらかわしの制御解除を待つだけなのだが……

「健二！」

「ま、待って！ 暗証番号の変更が早すぎるよ！」

既に一度健二は暗号を解いている。が、解除するより早く、ラブマシーンが番号を変更してしまうのだ。

「……よし。解体します！」

解除バーが半分もいかないうちに、番号が変えられてしまう。

「くそっ！」と、あの健二が悪態をつくほどの早さで。時間は、あと二十分。

「……ラスト一回だ。解除だけに集中してくれ。あいつはこっちでどうにかする」

「……はい」

「小磯」

泣いても笑っても、これで最後の最後。だから、湊は健二に笑った。とにかく最後なら、笑わないと。

「湊先輩？」

「僕がそっちへ帰ったら、佐久間と三人で美味しいもの食べに行こう。奢るよ」

「！　　はいつ！！」

託すしかできない自分を歯痒く思い、湊は拳を握りしめた。自分がニユクスに向かう時の仲間も、こんな気持ちだったのだろうか。

「……頼むよ、小磯」

誰にも聞こえない大きさを、湊は呟いた。

— — — — —

「……よし」

大きく息を吸って、一気に紙に数字を殴り書いていく。

呼吸をする間すら惜しい。自分を信じてくれる人の為にも、失敗するわけにはいかない。

これほどにプレッシャーがかかる中で、手がまるで震えないことに内心驚いた。

「……こりゃ過去最速だな」

佐久間の声が遠くに聞こえる。感じる感覚は数字を書く手と、数字を認識する目の感覚のみ。

計算に余計なものは一切、排除する。

「佳主馬！ ラブマシンをブツ叩け！

今あいつの防御力をゼロにした！」

「わかった！」

ディスプレイからも何か聞こえて来るが一切を無視。
自分は答えを出して、それを打ち込むことだけを考える。

「でき、たっ！」

気がつけば一分を切っている。間に合え、と健二は迅速かつ正確に
パソコンのキーを打ち込んだのだった。

――
――
――
――
――
――

「よろしくお願いしまあぁあす!!！」

ディスプレイ越しに健二の声が聞こえて、画面の中ではカズマがラ
ブマシオンを殴り飛ばしていた。
キングの拳を受け、ラブマシオンは粉々に砕け散る。

「みんな！ 伏せて！」

理一の声を聞いて、湊は反射的に隣にいた夏希を抱きしめていた。

――爆音が陣内家の真隣にある山から聞こえた。
そして、次に衝撃と凄まじい風圧。

それなりに軸はずらしてあるにも関わらずこれなら直撃した場合は

どうなるのだろうか。そこまで考えたところで、先ほどまで家をも揺らしていた風が止んだ。

「……助かつ、た？」

「みたい」

そんな声が聞こえて、湊も目を開けた。そこには、顔を真っ赤にした夏希が……

「あ、ごめん」

「う、ううん。ありがとう……」

立ち上がり、あらわしが落ちた場所を見してみる。隣の夏希が自分を見てくるのが少し気になるが、今の好奇心は山から湧き出る”ソレ”だ。

「あれって、温泉？」

「みただね。何はともあれ、無事で良かった」

理一の言葉に、全員が盛大なため息を吐いた。
こうして、ラブマシーンと陣内家の戦いは陣内家の……いや、人間の勝利で幕を閉じたのだった。

一一一一一一一一一一一一一一

「おや、やられたか。もしや、侘助くんが手助けでもしたかな？
ならばこの結果も無理はない」

道を歩きながら男は携帯を見て小さくため息を吐いた。それすらも胡散臭く感じるような動作で、携帯を閉じる。

221

「だが……それでは”計画”を始めてみようではないか。我が”因子”がどう行くか。
さあ、再び”滅び”への第一歩を歩もうではないか侘助くん！」

気味の悪い笑い声をあげて、男は歩いていく。
ゆっくり、ゆっくりと……

一一一一一一一一一一一一一一

「……………」

何故だろうか、湊の心はざわついていた。
ラブマシンは倒し、あらわしも直撃しなかった。間違いなく勝つたはずだ。なのに落ち着かない。何か、嫌な予感が彼の心を支配する。

「あの、湊くん」

そんな心持ちのまま夏希に話しかけられ、湊は後ろに振り返った。
夏希の後ろには、温泉がまだ沸き出している。

「その、さっきは――」

はにかむ夏希が何か言おうとした時、湊の真横のパソコンから何かが出たのを視界に捉え、彼は意識をそちらに向けていた。

――
――
――
――
――
――
――

「……」

まずい。どうしようもなくまずい。

夏希はまだバクバク鳴る心臓に止められとお願いした。いや、完全に

止まったらダメだが。

「……………」

ここに来て、夏希は完全に自分の感情を理解した。理解してしまった。

何故湊に名前で呼べと言ったのか、名前で呼んでもいいか聞いたのか、あの笑顔に嬉しいような不思議な気持ちになったのか。

さっき抱きしめられた時に、わかってしまった。

自分が、湊を好きになっていたということ。

「あの、湊くん」

自分に振り返る湊。その表情はどこか曇っていて、何か焦っているようだった。

「その、さっきは——」

けれど、焦っているのは自分もだった。

だから、まずはありがとを言おうと。夏希は口を開こうとしたその時、パソコンから何かが出て来て、自分は湊に突き飛ばされていた。

— — — — —

動けたのは、嫌な予感のおかげだったと言っ
ていい。咄嗟に夏希を突き出し、両手に持
った座布団を盾のように突き出した。

「ぐっ……」

防ぎ切れなかったのか、座布団から手
を離して後ろに転がる。立ち上がって、
湊は呆然とした。周りから声が聞こえ
ないのもわかる。何故ならば、

「ラブ……マシーン？」

先ほどまで戦っていたAIが目の前
に立っていたからだった。

「侘助、あなたの作ったモノってパ
ソコンから出てくるの？」

「そんなわけあるかよ。……しか
も、なんだよあの顔は」

長身状態の姿で現れたラブマシ
ンの顔は奇妙な仮面に覆われて
いた。

「っ……」

見覚えのないわけがない、その仮面。

”やつら”は全て、同じような仮面をつけていた。それでも、湊には信じられなかった。

「シャドウが、なんで……」

そう、ラブマシーンはシャドウの仮面をつけていた。それは間違いない。

けれど影時間はなくなり、シャドウも消えたはず。そもそも、影時間ですらないここにシャドウが現れることがおかしいのだ。

「っ……」

放たれた拳を咄嗟に避け、同じように腹部へと拳を放った。数発殴り、そのまま後ろ蹴りでラブマシーンを後退させる。

「湊くん！」

「……っ！」

ダメージはないようだが、湊は走って飛び蹴りを打ち込んだ。とりあえず庭にまで吹き飛ばして、それから視界に入った場所へ、一目散に駆けていく。

「横だっ！」

万助の声に合わせて前へ飛び込み、そのままクルリと前転。目的のモノを取って、相手へと向き直った。

「……これが、僕のいる理由？　まだ、まだ終わってないって言うの？」

疑問は尽きない。けれど、疑問の為に思考の海へ沈む為には、目の前の敵を倒さなくてはならない。

「……いいよ、ならー」

鞘から引き抜いて、刀を構える。それを右手に持って、湊はラブマシーンを睨み付けた。

「まずはお前を倒してからだ」

駆け出して、ラブマシーンへ斬りかかる。拳に当たった瞬間、金属音が鳴り響いた。どうやらあの拳は金属のようなモノでできているようだった。

「ふっ」

アナライズがない以上、弱点も耐久も無効も反射もわからない。わからない以上、自ら触れるしかない。

「そっ」

湊の刀がラブマシーンの脇腹に当たり、湊の腹にラブマシーンの蹴りが当たる。ラブマシーンの脇腹は黒い煙が吹き出て、湊は縁側まで吹き飛んでいた。

「くっ……」

「湊くん！」

ラブマシーンの身体を見る限り斬撃は通るようだ。湊は痛む腹を押

さえて冷静に解析する。それから一度目を瞑って夏希へと視線を向けた。

「僕のカバン、持ってきてもらえる？」

シャドウがいるならば、できる。いや、できなければ、勝てる可能性は低い。

「え？」

「早く」

刀を構え直して、湊はラブマシーンを睨み付けた。

「っ、はあっ！」

夏希が走り出したのを見て、湊はラブマシーンへと駆け出した。拳を受け、避け、斬撃を放つ。威力もわからない以上、迂闊に攻撃はくれない。

「……凄い」

佳主馬の声が聞こえた気がした。見ている余裕はないが、自分以外は家の中にいる。ならば大丈夫だろう。一撃を避けて、再び踏み込む。そのままラブマシンの首へ向けて刀を振り抜き、避けられた。上体を後ろへ反らして刀を避けていた。

「っ……」

咄嗟に後ろに飛んで両手を交差する。戦っていた時のカンは鈍って
いなくなったようだった。

骨が軋む音と共に真後ろに吹き飛ばされて数回庭を転がった。後ろに飛ばなかったら折れていたかも、と内心で舌打ちし、自分に走ってくる人を見る。

「っ、これ？」

「うん。ありがとう」

目の前では、ラブマシーンがこちらへ手を向けていた。

そこに炎が集約していくのがわかる。炎系のスキルを放とうとしているのだろう。湊はカバンからソレを出すと、刀を左手に持ち変えた。

「拳銃……？」

心臓の音がやたら大きく聞こえる。引金にかけた指が、やたら鈍く感じる。

「……大丈夫。やれる」

あの人は、自分ならやれると笑って言ってくれた。
これがラブマシンなら、まだ約束は果たしていない。

「————」

ラブマシンの手から炎が走る。家の中で誰かの悲鳴が上がり、湊はそれを自らのこめかみに押し当てた。
独特の、死を連想する感覚を感じる。
けれど、今の彼には、それすらも高揚する要因の一つだった。

「ペルソナ！」

だから、その心を全て以て、彼はその引金を引いた。

—————

「天使……?」

夏希の声で、佳主馬は目を開いた。目の前には、大きな羽を複数持つ天使が佇んでいた。あの炎はどこにもなく、自らのこめかみに拳銃を当てたままの湊が、小さく笑った。

「あれ、湊くんが出したの……?」

「こりゃ、なんつー手品だよ」

あまりに浮世離れた事態に、一同の反応はやや間拔けたものだった。

ただ……ただ夏希だけが湊をジッと見つめていた。

「ルシフェル」

最後の戦いでユニバースを召喚する前につけていたそれを消して、湊は自らの身体に訪れた変化を探る。
正しくは、戻っていた。

「……おかえり」

自らの中に存在する複数の感覚。それは、彼がワイルドの力に目覚めたペルソナ使いであった証であり、変わらない力を持っているという安堵だった。

見られてしまったが、これで守れる。と湊は笑った。

「ここで明けの明星を撃つわけにもいかないし……うん。なら」

脳内で、意識を切り替える。パキンと音が響いた感覚がして、湊の感覚は別の存在によって書き換えられていた。

「行くよ、ラブマシーン」

先ほどよりも速く、湊はラブマシーンへと向かっていく。ペルソナを再び召喚したからか、それによる恩恵が彼に力を与えていた。

「呪殺^{ムト}……？」

呻き声と共に、黒い手が湊に絡みつく。程度はわからないが、それは一撃で相手を瀕死にする恐るべきスキル。だが、

「残念」

湊の眼前で波紋が四角に広がり、その手が砕かれて相手に巻き付く。無論、その手はあっさり砕け散った。

湊は、ラブマシンの呪殺を反射したのである。そしておそらく、ラブマシンは呪殺を無効果した。

「はあっ！」

一回斬りかかり、反撃を受けるより速く離れる。

彼が走って近づいた理由は二つ。一つは、近くにいた夏希を巻き込まないように。

一つは、ペルソナの攻撃を当てやすいように。

「タナトスッ！」

再び召喚器をこめかみに当て引金を引く。今度は先ほどの天使とは違う、刀を持った異形の存在が現れた。その姿はどこか、死神を連想させる。

彼の中に十年宿った、友人の姿。喚び出してその姿を見た瞬間、湊は懐かしさに笑ってしまった。

「久しぶり、ファルロス。いや……綾時」

返事はない。けれど、湊はやっぱりその姿に笑ってしまった。

「五月雨斬り」

咆哮と共に、タナトスがラブマシーンへ突撃する。

一瞬、凄まじい速さで何か光が走り、次の瞬間ラブマシンの左腕を切り裂き、飛ばしてていた。

「……終わらせよう」

冷静にそれを見て、湊はそう呟いた。

——
——
——
——
——
——

あの拳銃を使つてからの湊は、凄まじい強さだった。

刀を持った異形はラブマシンの片腕を斬り飛ばし、今は猛攻するラブマシンの攻撃を捌き続けている。

時折口元に笑みを浮かべるが、その瞳はとても綺麗で、強かった。

夏希は、そんな湊を見ていた。見惚れていた、と言った方が正しいのかもしれない。

「ただ者じゃないとは思ったけど、何者だよ、こりゃあ」

「さあね……けど、俺らを守ってくれてるのは確かだよ」

「シシシ、まあな」

なんであれ、ラブマシーンを止められるのは湊しかない。ならば、任せるしかないか。と侘助は笑った。

「そら、ここで黙って見てないで応援してやれよ」

「……なんで俺が」

自分を睨む佳主馬に、また侘助はシシシ。と笑った。

「じゃ……ほら婿殿！ とつとつちまえ。開発者が許可する。……ああ、今は婿殿じゃなかったな」

そういう顔は笑顔で、わかってて言ってるようだった。

そんな侘助に呆れた視線を送る佳主馬の隣で、また声があがった。

「おい湊！ 負けんな！ そこだ！」

あれほど湊をやっかんでいた翔太だった。彼は基本、口は悪いが人はいい。しかも情にも篤く、夏希が絡まなければ案外湊とは仲良くしてたかもしれない。

そんな彼が、一人で戦う湊を応援しないわけがない。

「相手は弱ってるぞ！ ドーンと一気に決めちまえ！」

「大技やっちゃいなさい！」

口々に湊を応援する言葉が庭に向けられていた。

侘助はニヤニヤ笑って自分を見るせいで、相変わらずの仏頂面しかできない。できないが、

「……………頑張れ、湊さん」

応援したくないわけがない佳主馬は、小さくそう呟いていた。

「湊くん……………」

家族が湊を応援する中、夏希はただただ湊を見ていた。

あの天使や異形を召喚しても無敵と言うわけではないようで、湊は私服が所々切れており、顔や腕には小さな傷がいくつもあった。け

れど、湊は戦う。その瞳に、強い意思を込めて戦う。ならば、自分にできることは――

「負けないでっ！　湊くん！」

大声で叫んだ。家族に負けなくらい大声で。

それが届いたのか、湊の斬撃がラブマシーンへと袈裟斬りに入っていた。

――
――
――
――
――
――

「じじっ！」

斬撃に手応えを感じた。元々シャドウに対して人間の兵器は大したダメージを望めない。グローブで殴っても、銃で撃つても同じくらいしかくならないからだ。だから、この隙に、最大技を叩き込む。

「ペルソナ」

再び現れる異形の死神。先ほどと違いラブマシーンへ突っ込まず、その場で刀を構えた。

「空間殺法！」

ヒュン。と真横に一線。おそらく、誰にも視認できなかったであろう斬撃が湊の周囲を走った。

ラブマシーンは、目の前で硬直している。それが何の硬直かわかって、湊は刀をおろした。

ラブマシーンの身体に二本の線が入り、それぞれ身体を横にずらししていく。だるま落としのだるまのように、それは地面へと落ちて黒い煙になり空へ消えたのだった。

一一一一一一一一一一一一一一

「やったの？」

「一応……は？」

ガクリと膝が折れて、地面にしゃがみ込んでしまう。久々のペルソナ召喚に疲れてしまったようだった。

「湊くん!？」

「だ、大丈夫。それと……その……」

こちらへ駆けてくる夏希に言っ、それから俯いてしまっ。ペルソナのことをどう説明しよう、むしろ大丈夫なのだろうか、といろいろ考え込んでしまっ。

「……さすが母さんの認めた子ね。やる時はやるって言うのがよくわかりました」

「え？」

聞こえた声に見上げれば、万里子が自分に笑いかけていた。

「あれは何かはわからないけど、湊くんにも事情があるんでしょう。そういうのはともかく、お疲れ様」

「え？ いや、けど……」

「けどもへチマもあるもんか。お前が陣内の恩人なのは事実なんだからな」

万助が豪快に笑って湊の背中を叩いた。普通に痛い、それとは別

の、よくわからない何かが胸に広がっていく。

「……うちの家族はこんな感じた。お前さんがどうとかってより、まずありがとを先に言う。それと、これくらいのことなら平然と受け入れちまう。

ま、俺もさっきまで忘れてたんだが」

シシシ、と侘助が笑って家の中へ歩いて行く。周りには陣内の皆さんに囲まれて口々にいろいろ言われている。動こうにも夏希に右腕を両手で抱きしめられるように掴まれて動けない。

「……」

困った。非常に困った。だから、とりあえず湊はいつものアレを言うことにしようと思った。

それがいい。とペルソナ達も賛同してくれている、はず。せーの、さん、はい。

「……どうでもいい」

その言葉は、いつもより明るい声になっていた。

第十話 "ラストバトル" ; (後書き)

…… やっちまったぜ

一番最初からこの展開はずっと考えていました。次回作への布石とペルソナ3を入れることを決めた時点で。タナトスで決めることも考えてました。やっぱり綾時クンがいないとダメですよ！

陣内の皆さんも、あの栄おばあちゃんの血筋ですから、湊が自分達を守ってくれたって事実だけで充分だと思います。それくらい優しくて器の大きい人達の集まりだって思ってますから。

さて、最終話直前にしてシャドウとペルソナなんていう超展開ですが、しっかり次回作で拾います。むしろ一番最初に考えたのは次回作からでして、その為にこれを書いたってのが真実です。

さて、初小説な上に約三日ほぼ四日で一気に投稿して来ました。未熟だったり、変な表現や曖昧な表現が多数あったと思います。自分なりに全力で書いたけど、間違いなくあります。

ですが、そういうところを徐々に変えていって、話数を増すごとに、「あ、こいつ上手くなっただなあ」

って思われるような書き手になれるといいなと思います。

…… 最終話ですらないのに何言ってるんだろうね(笑)

評価してくれた方、お気に入り登録してくれた方、アクセスしてくれた方、ただただ感想をくれるかもしれない方、これからも見放さずに生温く見守ってやっててくださいませ。よろしくお願いします。

では、最終話の後書きで会いましょう。

最終話 " 一番暑い夏の思い出 "

「はっぴばーすデーとうーゆー」

夏希が弾くウクレレに合わせて全員が歌を紡いでいく。後ろには明るく笑う栄の遺影があり、たくさんの花が添えられていた。

あれから一日経って、栄の葬儀が行われたのだ。家が所々破損している上に突然の葬儀で忙しかったが、陣内家のみんなは笑顔で誰も疲れたなどと言わずに作業をした。

しみりした別れなど、栄は望まない。だからこそこうして、栄の誕生日を祝っているのだ。

「……本当にいいんですか？」

「当たり前よ。ほらじっちじっち」

「あー！ 直美おばさん何してるのよ！」

遠慮する湊の首に手を回して自分のところに寄せて、直美はニヤリと笑った。

「酒くわい……」

もしかすると、酔ってるのかもしれない。なんて思ったら、反対か

ら怒鳴り声。夏希が私ってば怒ってますと言わんばかりの表情で直美から湊をひっぺがした。

「あーら、夏希ってばヤキモチ妬きねえ」

「なっ、なななななっ」

「……写真、撮るみたいだよ」

夏希の顔が赤くなってる理由がいまいちよくわからない湊は、とりあえず夏希に写真屋さん指差して落ち着かせることにした。

「うっ……」

「行きますよー！ はい、チーズ！」

パシャリと写真が撮られる。みんな、栄ばりにいい笑顔だった。湊は、ちよっと笑っただけだが……

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

「よう、湊くん」

「侘助さん」

「ああ。別れの挨拶を、と思ってな」

「??？」

「これから一回警察に出頭だよ。情状酌量の余地があるそうだが、一応な。んでそのまま帰るから、またなってことだ」

「なるほど」

「まあ、なんだ。ありがとう」

「……気にしないでください」

「シシシ、そうも言えるか。恩人なんだからな。これ、俺の電話番号だ。小磯くんや佐久間くんにも渡しておいてくれ。何かあったら力にくらいなってる」

「はい」

「じゃあな。そのうちまた婿殿と言える日が来るのを待ってるよ」

結構冗談抜きな佗助の言葉なのだが、湊は冗談と取ったのだろう。苦笑して佗助にペコリとお辞儀した。

それを受けた佗助はまたシシシ。と笑って玄関へと歩いて行く。

「やっぱり、似てた」

不器用なところも、優しいところも。それがわかったことが湊は嬉しかった。

せっかく教えて貰った連絡先なのだから、OZで話す時にでも誘おう。なんて思いながら渡されたメモ用紙をポケットへとしまい込んだのだった。

「あ、湊さん」

「佳主馬？」

次に来たのは、制服姿の佳主馬と、見慣れない坊主頭。

「了平兄ちゃん、この人が湊さん。んで湊さん、この人は了平兄ちゃん」

「……ああ。はじめまして、有里湊です。甲子園、優勝おめでとうございます」

「あ、ありがとうございます」

確か、一つ下の……と湊は脳内で情報をまとめていく。それは当たってたようで、了平もペコペコする湊に合わせてペコペコしていた。

「湊さん、次会ったら組み手の相手になってよ」

「いや……けど」

「いいから。大丈夫、簡単にはやられないよ。ただし、アレはなしね」

アレとはペルソナのことだろう。当たり前だ、と湊は苦笑した。

「わかった。約束する」

「ん。約束だよ」

「そついや……湊さんて、うちの恩人なんスよね？」

「そ。あの栄おばあちゃんが認めた人なんだよ。ま、詳しい話はおばさんに聞けばいいんじゃない？」

佳主馬の言葉からは気持ちトゲが取れて丸くなったように感じられる。

彼もこの件で幾分か成長したのかもしれない。

湊のことを言う時はどこか誇らしげに言ってる気がしないでもないが……

「あの栄おばあちゃんが認めたとは……すげえ人なんスね！」

了平はと言えば、なんか理解できない眼差しで湊を見ていた。

逆に湊は了平を見てこいつは体育会系か……と内心で呟いた。同じ部活だったミヤこと宮本と同じ部類の雰囲気がある。間違いなく熱いタイプだ。と自己完結させて、その場から立ち去ることにする。

「ちょっと用事があるから、また」

「ん、またね。湊さん」

「今度話聞かせてください！」

二人に手を挙げて、湊はその場を後にしたのだった。

—
—
—
—
—
—
—

「……あ、湊くん」

「ん？ 夏希、どうかした？」

「い、いや……えっと、その……」

佳主馬と了平の二人と別れた湊はこれからどうしようかと廊下を歩いてきたところ、夏希とばったり遭遇した。
会った瞬間、夏希の頬が赤くなる。

「昨日は、ありがとね」

やがて、落ち着いたのか夏希は微笑みながら湊に言って、頭を下げた。

いつもの言葉が返ってくるよりも早く続ける為に、すぐに頭を上げたが。

「気にしていいからね。困ったら私に言ってくれれば手伝うから」

「……ありがとう」

「気にしないで」

いつも言ってる言葉を返されて、湊は思わず笑った。夏希と言えば、してやったりな顔で笑っている。

「いつも悩んでたのって、昨日のこと？」

おそらく、ペルソナのことだろう。完全に違う、とは言い切れないので湊は素直に頷いた。

「じゃあ、これで私も知ったことになるから少しは気が楽になる？」

「どうだろう。けど、来る前にあったモヤモヤが吹き飛んだ気はする」

相変わらず自分は話し下手で、いまいち馴染めないと思う。けれど、一年前にできなかったことをやろうと、頑張ろうとも思っている。だって、自分にはそれができるのだから。

「僕も、夏希にいろいろ救われたのかも」

「え？」

あのこいこいの戦いでは、心から夏希を尊敬し、惹かれた。自分も、ああいう風な人間になればいいとさえ思った。そのきっかけをくれたのは間違いない。夏希で、後押ししてくれたのは栄なのである。陣内って凄い。なんて今更ながら思って、笑ってしまった。

「――じゃあ、お互い様だね」

その笑顔をどう取ったのか、夏希はニコリと笑って湊を見つめた。彼女の人気の理由として、人の目を、顔を見て話すところがあげられる。ただ、真っ直ぐに。

そんな夏希の視線に、湊は何故か心臓が跳ねた。以前は何ともなか

ったのに、だ。

「……そう、だね」

思わず目をそらしてしまい、不思議に思った夏希が湊と目を合わせようと顔を移動させる。すると湊は逃げて、夏希が追う。最終的に、湊はその場から歩き出した。

「あっ、湊くん!？」

突然歩き出した湊に驚く夏希。同時に、視線を合わせてくれない彼に、ちよつとムカムカしてきたりして、

「ちよつと、待ちなさい湊くん！」

早歩きで湊を追っかける夏希。それに気づいた湊も慌てて早歩きで離れ、居間に入り込む。

追う夏希も居間に入って、湊とテーブルの周りをぐるぐる回っていた。

「待ちなさい！」

「待たない」

――居間のテレビではニュースが流れており、今日がこの夏一番の暑さであると伝えられていた。

おわり。

最終話"：一番暑い夏の思い出"：（後書き）

ここまで読んでくださった方、ありがとうございます。お疲れ様でした！

そして書いた自分もお疲れ様！

このペルソナ3 - Summer Wars - はここで終わりになります。

……ま、続くんですがね（何

湊クンと夏希先輩の関係はひとまずもどかしい立ち位置にとどまりました。

や、だってゆかりツチ達に靡かなかった男なんだぜ？　いくら夏希先輩相手でも簡単には才ちないって（笑　　いくら夏

ま、これからの二人の関係、それに陣内の皆さんや健二に佐久間、そしてペルソナ3のメンバーも入って様々な出来事が起こります。起こすつもりです
なので、次回でもまた皆さんとお会いできることを楽しみにしております。

たぶん、同日中にあがります。

だって大学生の夏休み長いんだもん。バイト先も潰れちゃってバイ

ト探し中なんだもん。

私自身、日々精進をモットーに頑張りますのでよろしくお願いします。

では、ばいばーいっ！

あ、次回予告見てってね！

エピソード(という名の次回予告)

「な、何故だ！」

「何故？ だってキミは失敗しただろう。足がつかないよう、後始末はしっかりしないと、ね？」

男はスーツを着た黒人の頭に手を置いて、ニコリと笑う。その笑顔は、見る者に寒気を与えた。

「や、やめる！ やめてくれ！」

「却下だ。ふふ、良かったじゃないか。キミも”滅び”の糧になるんだよ？」

「い、いやだ、やめてくれ！」

「……もういい、喰え」

「うぎぎやあああああっ！」

きつぱりと言いつて、侘助は笑った。
晴れやかな、憑き物の落ちたような笑顔だった。

「その、キミからラブマシンを買い取った男の名前を教えてくださいか？」

「名前？　　ああ、わかった」

道連れ用に聞いた名前だが、ラブマシンにあんな細工をしたのは間違いなくあいつだ。ならば、警察に名前を教えて動きを牽制した方がいい。

「そいつの名前は……幾月」

言いつらい名前だと言っていた。あの、いやらしい不気味な声で。自らをこつ名乗った。

「幾月修司」

と。

-
T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
-

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4128n/>

ペルソナ3-Summer Wars-

2010年10月9日03時46分発行